調査研究活動報告

鹿児島県宝島大池B･C遺跡の発掘調査

Prehistoric Tombs of the Oike B and C Sites, Takarajima Island in Kagoshima Prefecture

HARUNARI Hideji, SHITARA Hiromi and TAKENAKA Masami

春成秀爾・設楽博己・竹中正巳

はじめに

国立歴史民俗博物館では，1993-98年度に特定研究「列島内諸文化の相互交流」（代表・朝岡康二民俗研究部教授）を実施した。その目的は，九州本島と南西諸島の文化交流の接点であった吐噶喇（とから）列島を中心とした地域の文化の形成・変容と相互交流の実態を，日本列島だけでなく，東アジアなど周辺諸文化との関係を視野にいれて明らかにしようとするものであった。そして，考古学，民俗学，歴史学の諸分野による学際的研究にもとづいてこの地域の歴史と文化を具体的に把握することを目指していた。

考古研究部では，春成が代表になって「宝島大池遺跡発掘調査班」を編成して，鹿児島県鹿児島郡十島村宝島に所在する大池遺跡の発掘調査を実施することにした。

この遺跡を選んだのは，熊本大学考古学研究室がすでに発掘調査した実績があり［渡辺編 1994］，そのさいに露出していたサンゴ（ビーチロック）の板石を組み立てた箱式石棺墓が未発掘であるとの情報を甲元眞之氏（当時，熊本大学文学部助教授）から伝えられ，発掘調査を勧められたことによる。大池B遺跡の箱式石棺墓は，1979年7月に宝島を踏査した島津義昭・野田拓治（以上，熊本県教育委員会）・中村愿（北谷町教育委員会）・中山清美（笠利町歴史民俗資料館）の諸氏が発見したものであった。そこで，1992年5月，発掘調査に先だって西谷大・藤尾慎一郎（以上，国立歴史民俗博物館考古研究部）の両氏が同島を訪れ予備調査をおこない，箱式石棺墓が現存することを確認する一方，貝塚時代前期の土器が散布している大池A遺跡の存在を確認した。同遺跡は，1964年8月に牛島盛光氏（東京教育大学）が民俗調査に訪れた際に発見，試掘をおこない条痕土器など先史時代の遺物に注意し，その後，1973年7月に国分直一氏（熊本大学法文学部）が中心になって本格的な発掘調査を実施し，3枚の遺物包含層を確認し，「ストーン･ボイリング」の遺構を検出していた。

予備調査の結果に基づいて1993年6月，春成は西谷と新東晃一氏（鹿児島県埋蔵文化財センター）とともに現地調査をおこない，大池遺跡の発掘調査に踏み切ることを決めた。

発掘調査班の構成は，春成秀爾，設楽博己，藤尾慎一郎，西谷大（以上，国立歴史民俗博物館考古研究部），菅豊（国立歴史民俗博物館民俗研究部），上村俊雄（鹿児島大学法文学部），甲元眞之（熊本大学文学部），木下尚子（梅光女学院大学），新東晃一（鹿児島県埋蔵文化財センター），中山清美（笠利町歴史民俗資料館）の諸氏である。さらに，大池B遺跡から人骨が出土したので，小片丘彦，峰

和治，竹中正巳（以上，鹿児島大学歯学部）の3氏の参加を得た。林謙作（北海道大学，国立歴史民俗博物館客員教官）氏も参加し，視察に来島した佐原真（国立歴史民俗博物館副館長），国分直一（梅光女学院大学），白木原和美（熊本大学文学部）の諸氏とともに，有益な助言を与えられた。鹿児島大学，熊本大学，九州大学，梅光女学院大学，天理大学，國學院大學，早稲田大学，筑波大学，シカゴ大学の学生諸君は，炎天下で汗を流しながら作業を黙々と進め，発掘調査を支えた。

図1　宝島を海上からのぞむ

第1次調査時には台風に襲われ，宿舎にしていた民宿浜坂荘の屋根が吹き飛ばされて，屋内は水びたしになるという出来事があり，調査参加者に強烈な思い出をのこした。

発掘調査は，第1次を1993年7月25日～8月29日，第2次を1994年7月30日～9月5日におこなった。私たちの発掘範囲には，宝島大池A遺跡：縄文前期の生活址，大池B遺跡：箱式石棺墓，大池C遺跡：集骨墓があった。そのうち，A遺跡とB遺跡の発掘は第1次・第2次調査にまたがり，C遺跡の発掘は第2次調査のときにのみ実施した。

調査にあたっては，鹿児島県教育委員会の向山勝貞氏（文化課長），遺跡が所在するのは村有地であったことから，十島村の松下傳男（十島村長），敷根忠昭（十島村助役），中西積（十島村教育長），松本慎一郎ら諸氏の配慮で発掘の許可を得ることができた。現地の宝島では，浦田兼光（宝島小中学校長），平田喜義（宝島総代），平田伝義，平田征克（宝島駐在員），松下直志（宝島郵便局長），平田秀吉，平田アツ子，宝島青年団の諸氏の多大な支援があった。

2次にわたる発掘調査の概要は，すでに発表している［宝島大池遺跡発掘調査班1995・1997］。さらに，大池B遺跡の箱式石棺墓出土の人骨の形質人類学的調査，年代測定研究およびDNA分析の報告は昨年公表している［竹中ほか2020，木下ほか2020，神澤ほか2020］。そこで今回は，大池B遺跡の箱式石棺墓そのものの報告をおこない，さらに大池C遺跡の集骨墓と出土人骨の形質人類学的調査の結果を報告する。

発掘調査から30年近い月日を経て，ようやく大池B・C遺跡の詳細を報告するにあたって，あらためて現地の情景，苦労された方々の顔が思い浮かぶ。小片丘彦，佐原真，中山清美，林謙作の諸氏は，すでに亡くなっていることを想うと感無量である。発掘調査の実現・遂行にあたってお世話になったすべての方々に深い感謝の意をあらわし，さらに炎天下での発掘作業に従った学生諸君の労をねぎらうと同時に，亡くなった方々の人と功績を偲びたいと思う。

（春成）

1　大池遺跡の概要

吐噶喇列島は鹿児島県に属し，口之島から宝島までの七つの島からなる。宝島は，その列島の最南端の島で，鹿児島郡十島村宝島に所在し，鹿児島県大隅半島の南端，佐多岬の南南西約250 km，奄美大島の北約90 kmの位置にある。古期火山帯に属する島で，島の大部分は火山岩で，周囲を

砂丘で囲まれ，海浜部にサンゴ礁が発達している不整三角形の平面形をもち，北西端―南東端が 5.0 km，島の中央部で北東―西南が 2.9 km，周囲 13.7 km，島面積 5.94 m^2 を測る。島の中央に屏風のように屹立するイマキラ岳の二つの連峰（標高 291.9 m と 254 m）と，乳房の形にたとえられた女神山（標高 130 m）は，麓から見ても海上から遠望しても，その景観は印象的で，1 度見ると忘れることはない（図 1・2）。宝島には鹿児島港から大型フェリー船に乗ると約 13 時間で到着する。調査当時の島の人口は約 140 人，現在は約 130 人である。

宝島の東北には，地元で「砂漠」と呼んでいる砂丘が発達している。砂丘には高低差があるが，最も高い内陸の砂丘は標高およそ 18 m であり，A 遺跡はこのあたりに立地する。北に行くにしたがい標高を減じ，B 遺跡はおよそ 14 m，C 遺跡はおよそ 13 m の砂丘上に存在している。

宝島大池 B 遺跡は，島の北東部に位置し，付近の海浜からは 700 m 離れた海岸砂丘上（標高 14 m）に立地している。大池 A 遺跡は，B 遺跡の西北西 150 m に所在する貝塚時代前期の住居跡を含む生活遺跡である。その時期は，沖縄諸島に分布する室川下層式土器と九州の轟 C 式が出土しているので，九州本土でいえば縄文前期併行期である［宝島大池遺跡発掘調査班 1995・1997］。B 遺跡は，貝塚時代後期末の箱式石棺墓である。C 遺跡は，B 遺跡の北西約 130 m，谷をはさんで離れた地点にあり，大池遺跡がのっている砂丘の北端に位置する。おそらく中世人骨の再葬墓である。今回は B 遺跡と C 遺跡について報告する。

（春成）

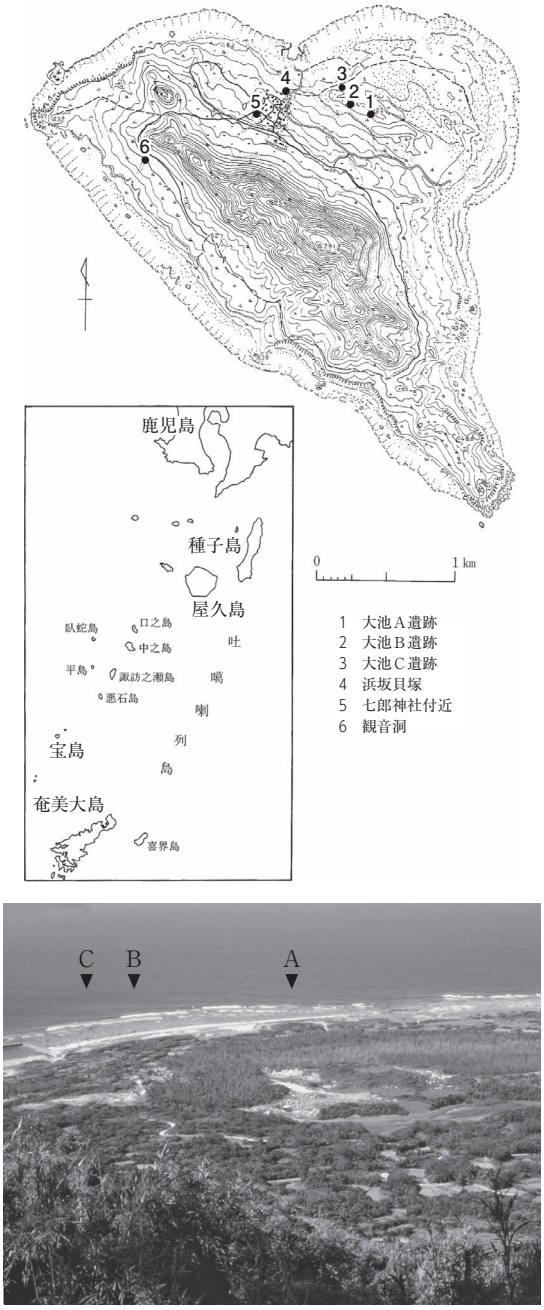


図 2　大池 A・B・C 遺跡の位置

2　大池B遺跡箱式石棺墓の調査

(1)　大池B遺跡の発掘調査

大池B遺跡の箱式石棺墓は，大池A遺跡から200 mほど西の砂丘に存在する。この砂丘は四方をアダンやササなどの林と藪によって囲まれているが，石棺の周辺は下草が生える程度で，木は1本もない。発見された時に石棺墓はすでに砂丘上に露出していた。標高はおよそ14 mで，石棺墓はわずかに盛り上がった砂の上に築かれていた。石棺墓の周辺にはかなり広い範囲にビーチロックが分布していたので，石棺墓の長軸を基準として南北4 m，東西6 mのグリッドを設定して発掘調査をおこなった（図3）。

石棺を発見した際に，石棺はすでに地表上にかなりの部分が露出しているとともに，周辺に配置されたビーチロックも露出した状況であった（図版2-1）。石棺墓は，ビーチロックによって構築された箱式石棺であるが，石棺の内部に大小の比較的丸い石が詰め込まれた状態になっていることが判明しており（図5），内部の石は石棺の蓋に相当するものであると推定された。そこでこれらを図化したのちに取り除き，石棺の内部に堆積している砂を除去したところ，仰臥伸展葬人骨一体が検出された。のちに1号人骨と名付けたこの人骨と石棺墓の実測と写真撮影を済ませたあと人骨を取り上げた。

第1次調査において，石棺墓の周辺に似たような砂丘の高まりがいくつか存在しており，20 mほど西の砂が盛り上がった斜面では人骨が，20 mほど北には露出したビーチロックが確認され，埋葬人骨の存在が予想された。そこで第2次調査ではグリッドを拡大し，56 m × 56 mにわたって4 m方眼の区画を設定し，1区画4 m四方，東西に1，2，3…，南北にA，B，C…の番号と記号を付けてそれぞれのグリッドをA1，A2……と呼んで調査にのぞんだ。箱式石棺墓は，J-11・12区に存在している。石棺墓構築時の地形に対してどのような状況であったのか確認するため，そして埋葬人骨の年代を明らかにする遺物を得るために，石棺を中心に南北―東西に数本のトレンチを入れて発掘調査をおこなった（図3・4）。

(2) 箱式石棺墓

箱式石棺墓の構造　石棺墓は数枚の側石と1枚の小口石によって構成される（図5・6）。石棺墓は長方形で短辺は40㎝，長辺は144～168 ㎝であるが，南側は攪乱により破壊されて小口石が飛ばされて紛失し，側石も一部紛失しあるいは横倒しになって位置もずれている。

小口石は41 × 34 ㎝の円形に近い大きな石を用いている。側石は長さ50 ㎝，高さ35～40 ㎝ほどの大型の石を選び，場所によっては20 ㎝ほどの石を用いて組んでいる。小口石に接する付近の側石は左右一枚ずつで差し渡しは65 ㎝ほどであるのに対して，真ん中付近は2～3重になっているので幅はおよそ80 ㎝と中膨らみとなる。内法はおよそ30～35 ㎝である。

1号人骨は頭骨の両側に1枚ずつ，頭頂部と小口石の間に2枚の石を立ててコの字形に頭骨を囲むようにしている（図版3-2）。右側の石は斜めになっているが，本来は左側と同様に立っていたのであろう。これらはいずれも扁平でくぼみの少ない石を用いており，側石がビーチロック特有のくぼみのあるごつごつした素材を利用しているのと対照的である。また頭頂部に立てられた石は二重

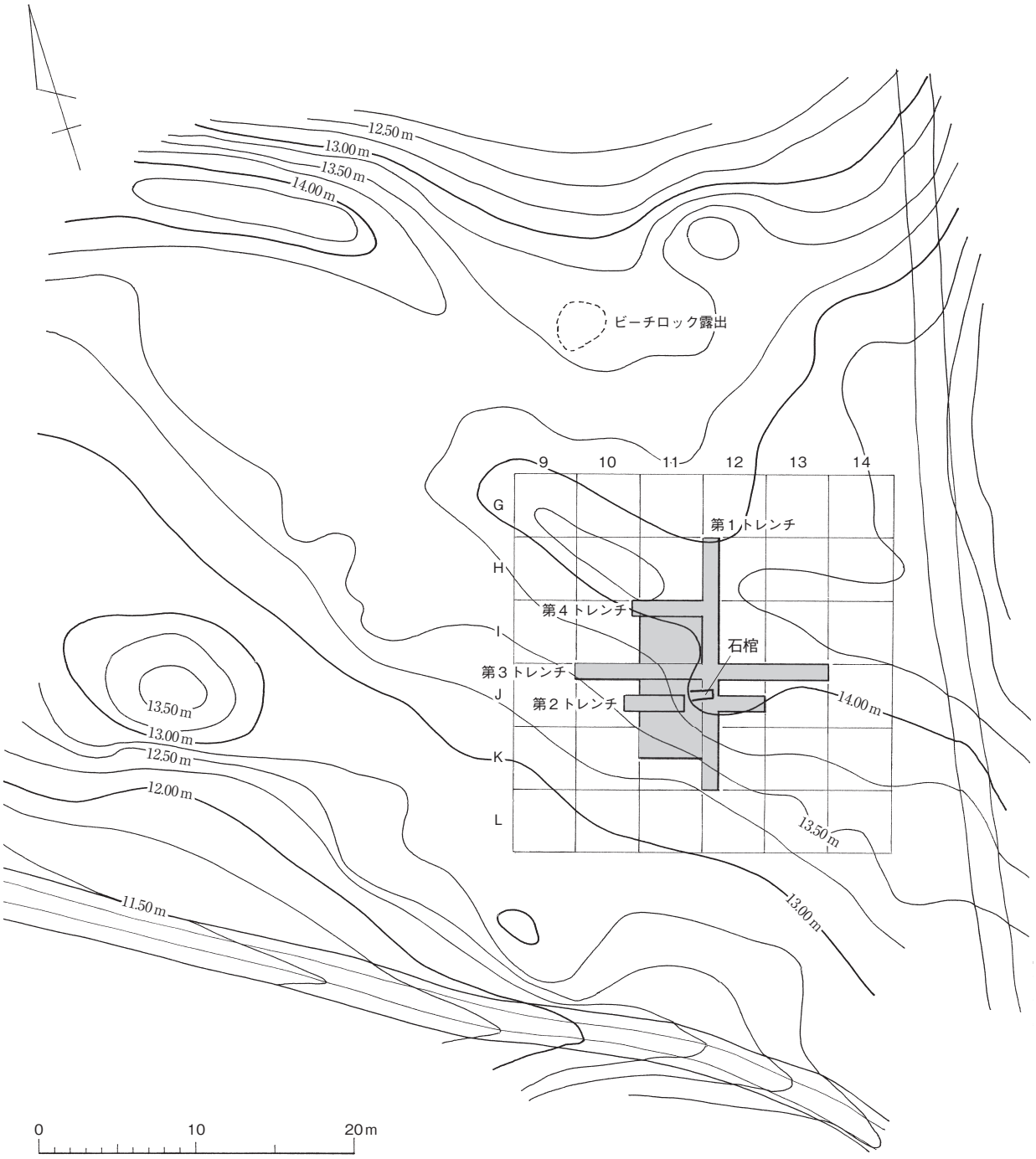


図３　大池Ｂ遺跡の地形と調査区

になっていることとともに丸い石を選んでいるのも印象的である。

石棺の底には厚さ3 cmほどの扁平な石が長さおよそ150 cm，幅およそ30 cmにわたってほぼ水平に敷かれており，人骨はその直上に安置されていた（図版2-4）。敷石の数は全部で15枚であり，おおむね2列に敷かれている。いずれも15～20 cmほどの扁平な石を用いており，頭骨を囲んだのと同じようなくぼみの少ない石を選別して利用している。

人骨の胸部と腹部，そして左鎖骨の上に15 cmほどの大きさの石を6個載せている（図7・図版3-1）。この石は塊状でごつごつしたビーチロック特有のものである。石棺の蓋石はそれよりも大き

な不整形のビーチロックからなる。なかには30～40 ㎝の大きな楕円形のビーチロックもあるが，それでも側石の幅よりは短くて側石に載るような大きさではない。そのうちの一つは頭骨の真上より内側に向かって斜めに傾いた状態で検出された（図5）。したがって，遺体を納めて砂で埋めたのちに石棺の中に載せるようにして石を安置し，遺体が腐朽してからそれらが落ち込んだとみられる。

石棺墓の構築手順としては，底石を敷いたのちに周囲の砂を若干掘りくぼめて側石や小口石を縦に埋めている。掘りあげた砂を直接埋土に用いて側石などを立てたようであり，掘り方は全く不明であった。

石棺墓周辺の配石　石棺墓の周りには，南北およそ3 m，東西およそ4.5 mの範囲におよそ40個のビーチロックが散在している（図4･5）。そのうち石棺墓の西北にいくつかある大型の扁平な石は，小口石を含むであろう石棺の構造材と考えられるが，石棺墓を中心として一定の範囲にとくに濃淡もなく分布していることからすれば，人為的に配置されたと考えてよい。

そのうち石棺墓の東小口の北に位置するビーチロックは，他と異なる。この石は直径がおよそ40 ㎝，高さおよそ25 ㎝とひときわ大型であり，底面は扁平だが半球形をなしており，上面にレンズ状のくぼみがある点で，墓域の目印となるような象徴的な意味をもつもののように思われる。

石棺墓の立地と土層堆積状況　石棺墓の構築状態を知るために，南北に第1トレンチ，東西に南から第2，3，4トレンチを設けて発掘調査した。またI-11，J・K-11区を掘り下げた。

各トレンチの堆積土層は6層に分けられる（図4）。1層は表土層であり，黒味を帯びた砂層。2･4･6層は灰味や淡い赤みを帯びた白色砂層であり，3・5層は褐色を帯びた黄橙色の砂層である。無機質な白色砂層と有機質な色の濃い砂層が交互に堆積していることがわかる。

第1トレンチでは，石棺を頂点として6層がマウンド状に堆積しており，とくに石棺墓から北と西は急な傾斜を示して下がっている。その上に3～5層が6層とほぼ平行した傾斜で堆積している。その上を覆う2層は，上面の堆積が水平に近づき，最終的に現在の地表とほぼ同じ傾斜をなす。第1トレンチ南半は1層の下がすぐに6層になるが，第2・3トレンチでは第1トレンチ北半と同じような堆積状況が捉えられた。

トレンチの発掘調査の結果，石棺墓の周囲の埋没地形の起伏は，とくに石棺墓の西北側で現在の地表とかなり異なっていることがわかった。石棺墓が構築されたのはどの層が堆積した段階なのか問題になるが，それは第2・3トレンチの発掘所見である程度明らかにすることができた。その手がかりになったのが，第3トレンチから出土した珊瑚礁の砂が固まった石灰砂岩であるビーチロックである。ビーチロックは石棺墓の構築材であるとともに周辺に配されており，それ以外の場所には露出していないので石棺墓に伴うことは明らかである（図4）。そのうちの一つは，第3トレンチの5層の褐色砂層上に乗った状態で4層から出土している。したがって，石棺墓は少なくとも2層が堆積する以前の3ないし5層の腐植質砂層堆積時に構築されたとみて間違いない。

2層は石棺墓からみて北と西にしだいに厚く堆積しており，石棺墓からそれぞれ8 m離れた場所で石棺墓との比高差が1.3 mほどに達しているので，構築時の石棺墓はもっと離れた北と西からは軽く見上げるような状態であったと考えられる。

石棺墓北側のビーチロック　石棺墓から西北20 mほどの地点に，ビーチロックが数個露出していた（図3）。墓標ないし棺材の一部の可能性があると考え，その一帯を地表から深さ30 ㎝ほど掘り

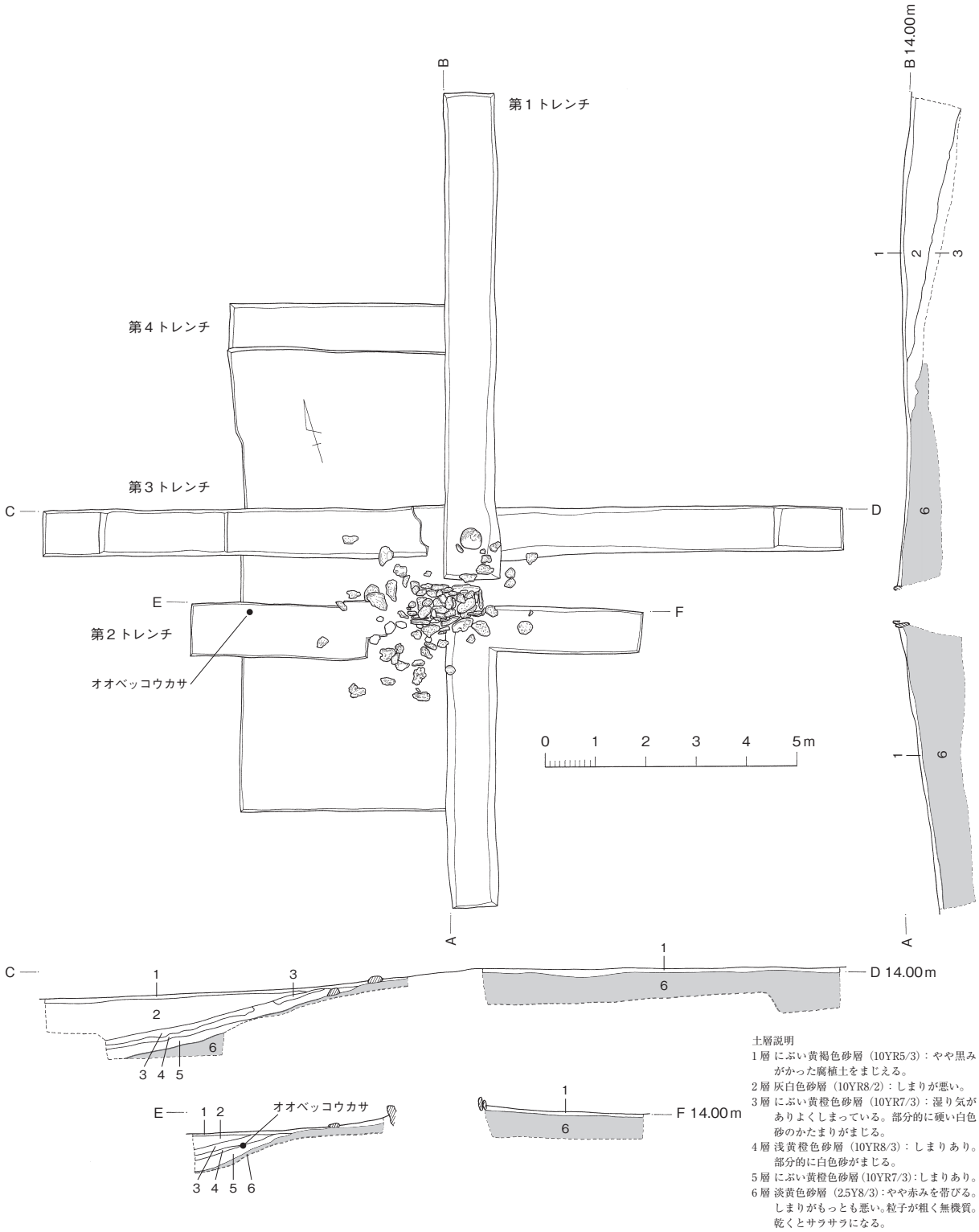


図４　大池Ｂ遺跡石棺墓トレンチ配置・土層断面

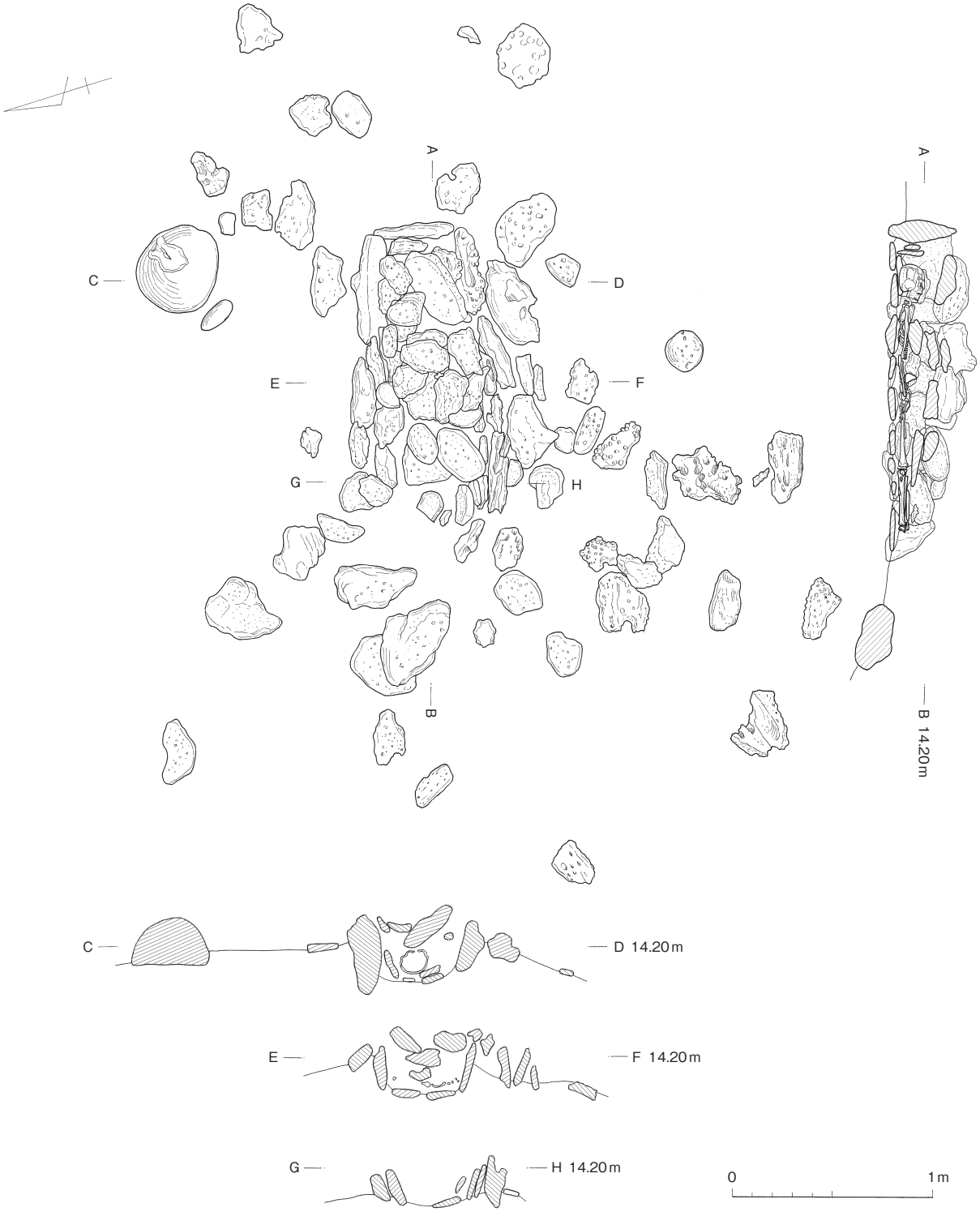


図５　大池Ｂ遺跡石棺墓

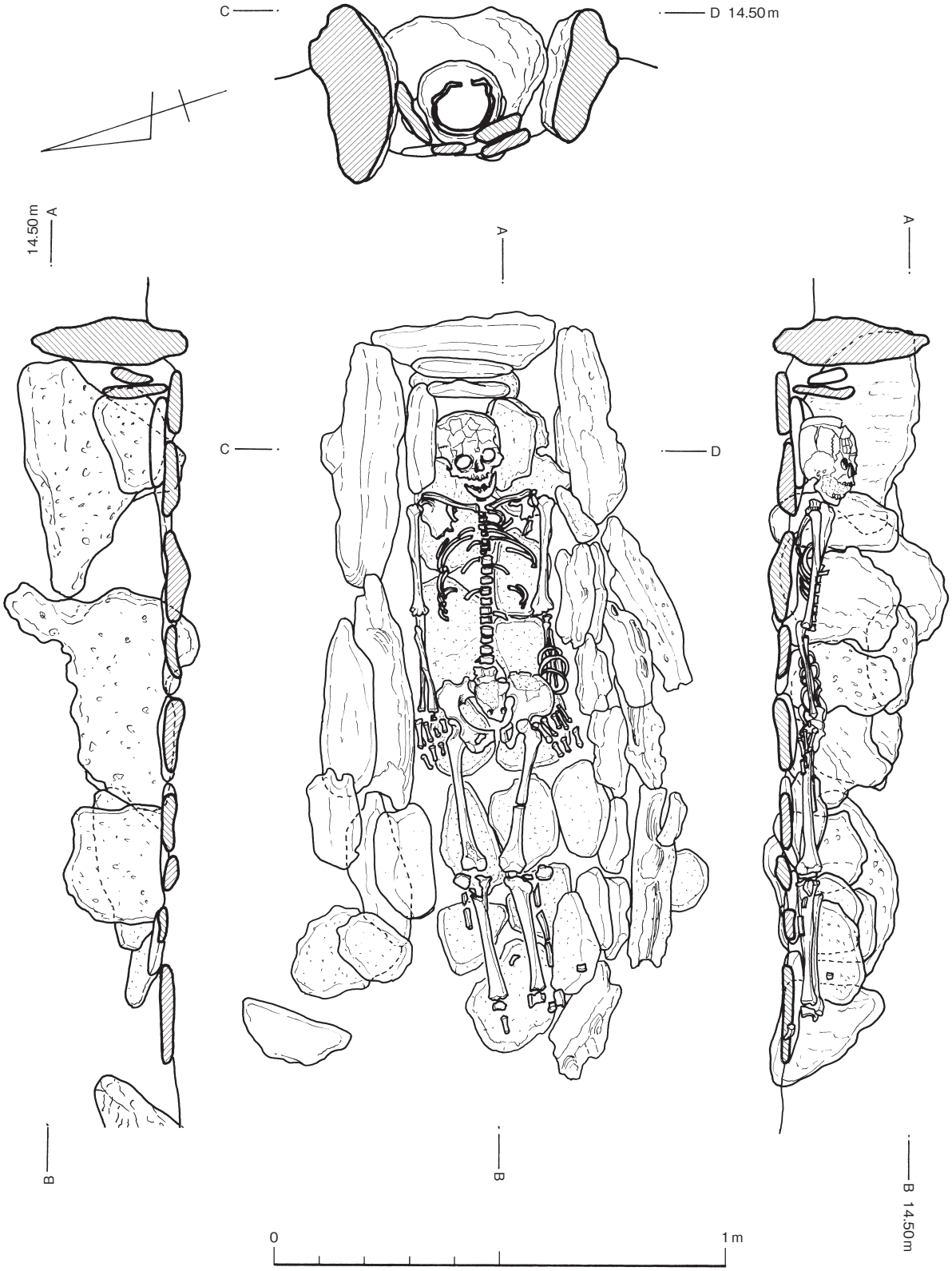


図６　大池Ｂ遺跡石棺墓と１号人骨検出状況

下げた。しかし，石棺や埋葬人骨などは検出できなかった。また，B遺跡各所の砂丘の高まりの下に石棺が存在しているか否か，ボーリングステッキによって確かめたが，明確な手応えはなかった。

（設楽）

(3) 1号人骨

人骨の出土状況　大池B遺跡の箱式石棺から出土した1号人骨の保存状態は良好である（図7・図版7)。遺体は木の棺などには納めずに，直接石棺に納めたのであろう。埋葬姿勢は仰臥伸展位で，両腕を体側に密着させるように伸ばし，脚もまったく屈折せずに伸ばしている。西側小口石の倒壊に伴って，両足首以下を欠失している。頭骨は蓋石の落下に伴って損傷が著しいが，よく残っている。肋骨の多くはおそらく自然に消滅したようであるが，そのほかの部位は比較的残りがよい。

頭部は4個の板石で「コ」の字形に囲まれていた（図版3)。腹部には塊石6個が載せられていた。副葬品は，左前腕にオオツタノハ製貝輪3個が着装状態で遺存していただけであった(図8･図版3)。

人骨の性別・年齢・形質　1号人骨の性別は寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と，年齢は寛骨耳状面の形状から熟年と判定される。大池B遺跡1号熟年女性人骨の形質を次に示す。

・脳頭蓋の径は全体に小さいが，特に最大長が短く，最大幅が大きいことにより，長幅示数は過短頭に属す。
・頭高が比較的高い。
・顔面部は全体に幅径が大きく，強い低・広顔を示す。
・眼窩部・鼻部とも幅径が大きく，低眼窩・広鼻を示す。
・眉間と眉弓は弱く隆起する。前頭骨平坦示数は小さく，平坦である。鼻骨平坦示数は大きく，鼻背の隆起は強い。
・外耳道骨腫は認められない。
・上腕骨は三角筋粗面が強く突出し，太く，扁平性が強い。
・大腿骨には柱状形成が見られるが，脛骨も扁平性が強い。
・推定身長は144.0 cmで低身長である。
・体肢長骨の近遠位長径比をみると，上肢では遠位の橈骨が相対的に長く，逆に下肢では脛骨が相対的に短い。周径比では，上腕骨の太さが目立つ。
・全身各所の関節に変形性関節症による骨棘が認められる。
・前頭骨と右頭頂骨にそれぞれ1か所ずつ陥没骨折の治癒した小陥凹が認められる。
・過度の咬耗，歯冠の破折，多数の残痕歯など特異的な歯列の状態を示す。
・上顎左側切歯，上顎左犬歯，下顎左中切歯の3本の歯に風習的抜歯が施された可能性も考えられるが，いずれの歯も単なる歯冠破折や病的な歯の脱落が起こっただけかもしれない。

大池B遺跡1号熟年女性人骨の特徴は琉球列島先史人に共通するものである。頭蓋の短頭性と低顔性，体肢骨では全体的な長径の短さと上腕の頑丈さ，推定身長の低さ，いずれも琉球列島先史人に共通する。頭蓋計測値9項目から求めたペンローズ形態距離からも，琉球列島先史人に近いことがわかる［竹中ほか2020］。

（竹中）

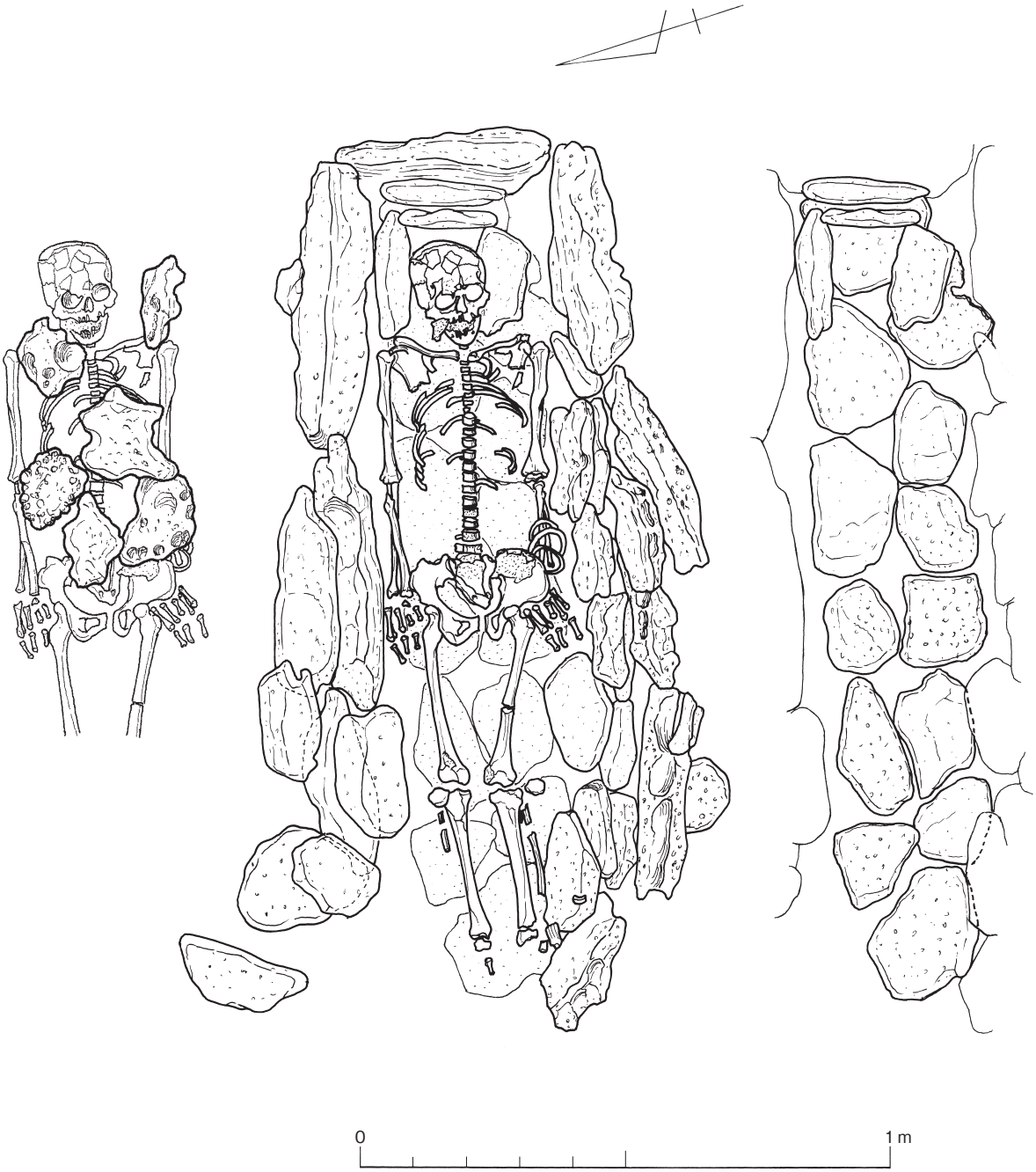


図７　大池Ｂ遺跡石棺墓１号人骨と人骨人のビーチロック検出状況および敷石平面

(4) 出土遺物

大池Ｂ遺跡の熟年女性人骨の左前腕にオオツタノハ製の貝輪３個の着装状態で発掘された。その特徴は以下のとおりである。前腕骨の近位端から遠位端にむかって1，2，3と呼ぶ。他に地点を異にして，包含層から出土したオオベッコウカサを４と呼ぶ（図８・図版４)。

１ 外径：8.25 ㎝× 6.4 ㎝，内径：6.25 ㎝× 4.9 ㎝。十分に研磨し，腕に直接接する内孔の両縁はよく研磨している。全体的に白色である。

２ 外径：8.8 ㎝× 7.2 ㎝，内径：7.0 ㎝× 5.4 ㎝。十分に研磨し，腕に直接接する内孔の両縁は丸く仕上げている。ごくわずかに褐色の部分がのこるが，全体的に白色である。

３ 外径：8.25 ㎝× 6.5 ㎝，内径：6.45 ㎝× 5. 4 ㎝。よく研磨して丸く仕上げてあり，部分的に放射録が溝状にのこっている。左右で幅がかなり異なっている。図の右上の外縁は，3 ㎝にわたって幅3 mm ほど欠損している。図の下の表面は，長さ2㎝ほどの範囲が著しく磨耗している。ともに使用によるものであろう。全体的に白色である。

４ 外径：8.2 ㎝× 6.75 ㎝，内径：4.7 ㎝× 3.6 ㎝，オオベッコウカサである。殻頂部の孔の周囲は未研磨で，環体の幅は広く，高さは高い。丁寧に打ち欠いて穿孔した貝輪の未成品かもしれないが，自然に孔のあいた非人工品の可能性が高い。石棺墓の西小口から南西３ m，J-11 トレンチ第３層か

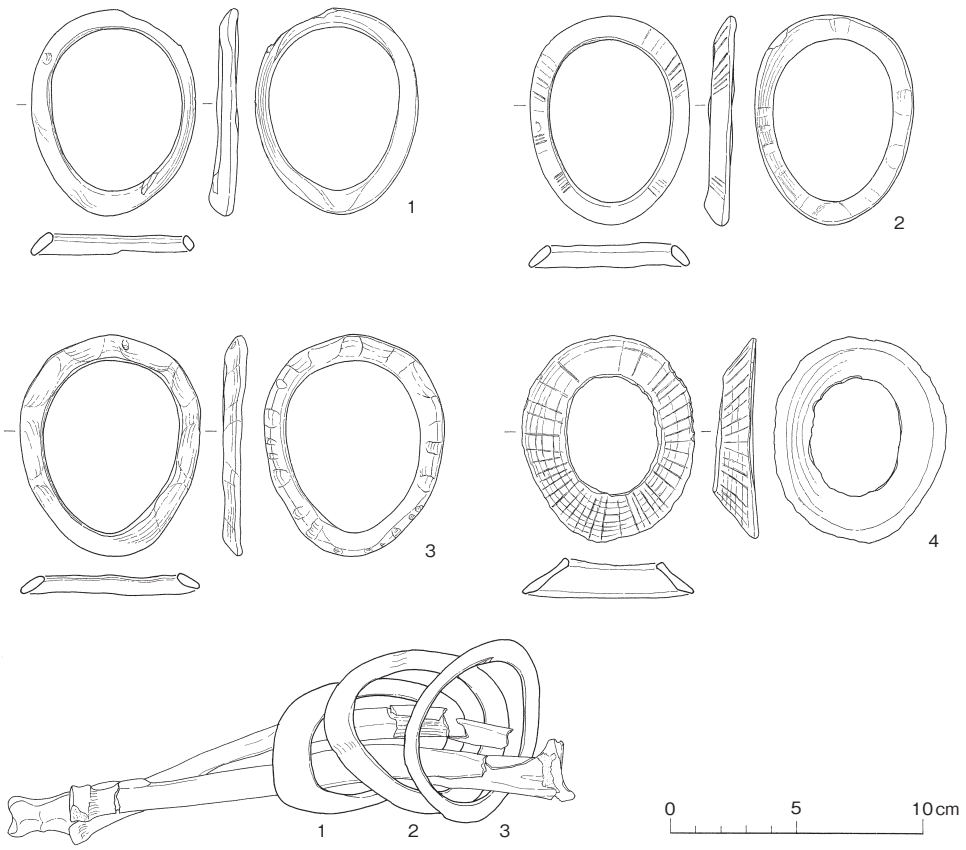


図８　大池Ｂ遺跡出土貝輪およびオオベッコウカサと貝輪の出土状況

らの単独出土なので，いずれにしても石棺墓との直接的な関係はないだろう。

着装していた貝輪の内径は，前腕の太いほうが大きく細いほうが小さい，すなわち2→3→1の順番を考えたいけれども，実際にはそうなっていないのは，腕の太さと貝輪の内径との間にまだゆとりがあったからであろう。それともう一つ考えられるのは，貝輪の着脱が可能で，亡くなる前に外していたのを，埋葬時に他の人が着装したために生じた現象かもしれないということである。後者の可能性が大きいと考えるが，生前の彼女の前腕の太さを推定することを可能にする材料である。琉球列島の先史時代にはオオツタノハ製の貝輪が，貝塚時代前期から同後期までみられる。大池B遺跡に近い所では，奄美大島の面縄第一遺跡の石棺墓に伸展葬された人骨が着装していた例がある。

オオツタノハは宝島でよくとれる貝であるから，素材に特別な価値は存在しないといってよい。琉球列島では，貝輪の着装はごく普通にみられ習俗であるから，これだけで着装していた女性を特別視することはできないだろう。

（春成・設楽）

3　大池C遺跡の発掘調査

（1）大池C遺跡と発掘調査の概要

人骨の発見と遺跡の立地状況　1994年の調査期間中，地元の青年団の方に，大池C遺跡の北側の砂丘で骨を発見し，ある程度露出させたのちに埋め戻したのを記憶していることを教えてもらい，案内していただいたところ，ビーチロックが散乱しており，かたわらに小骨が散らばっているのを確認した。そこでここをC地点として発掘し，1体の埋葬人骨を調査した。また，付近に小高い砂丘のマウンドがあり，埋葬跡の可能性も考えられたので，トレンチを入れて発掘調査した。

冒頭で述べたように，今回の報告にあたりC地点を大池C遺跡と名付けたが，この遺跡は大池B遺跡から谷を隔てて100 mほど北に行き，さらに50 mほど西に進んだ地点にある。B遺跡13Kの杭から見通した12 Kの杭を基準として，C遺跡の平板測量の基準杭まで開放トラバース測量をおこなった。

大池C遺跡は，大池B遺跡の乗っている砂丘の北端に位置する。南から北に向かい，等高線が高さを減じながらほぼ平行して走っているが，人骨が散乱している付近はその北に位置するマウンドを含めてやや複雑な地形になっている（図9）。マウンドの標高は11.75 mで，人骨が出土したのはその南西の標高11.25 mの付近である。さらにその北側はアダンや松がうっそうと茂っており，地形の状況ははっきりしないが，急傾斜のスロープになって海岸の砂丘に移行していると思われる。

調査区の設定とトレンチの発掘調査　マウンドも埋葬跡の可能性があると考え，発掘調査に先立ち人骨とマウンドが入るように1 m方眼の区画を設定し，東西に1～12，南北にA～Iの番号と記号をつけてそれぞれのグリッドをA1，A2……と呼んだ（図9）。マウンドのある地点はB11区を中心に4×1 mの第1，第2トレンチを十字形設定し，E2・F2・G2区に3×1 mの第3トレンチを，C2，C3区に2×1 mの第4トレンチを設定した。

小骨片が散乱していたのはG2，G3区を中心とした地点である。人骨散布地の北側E2，F2，F3

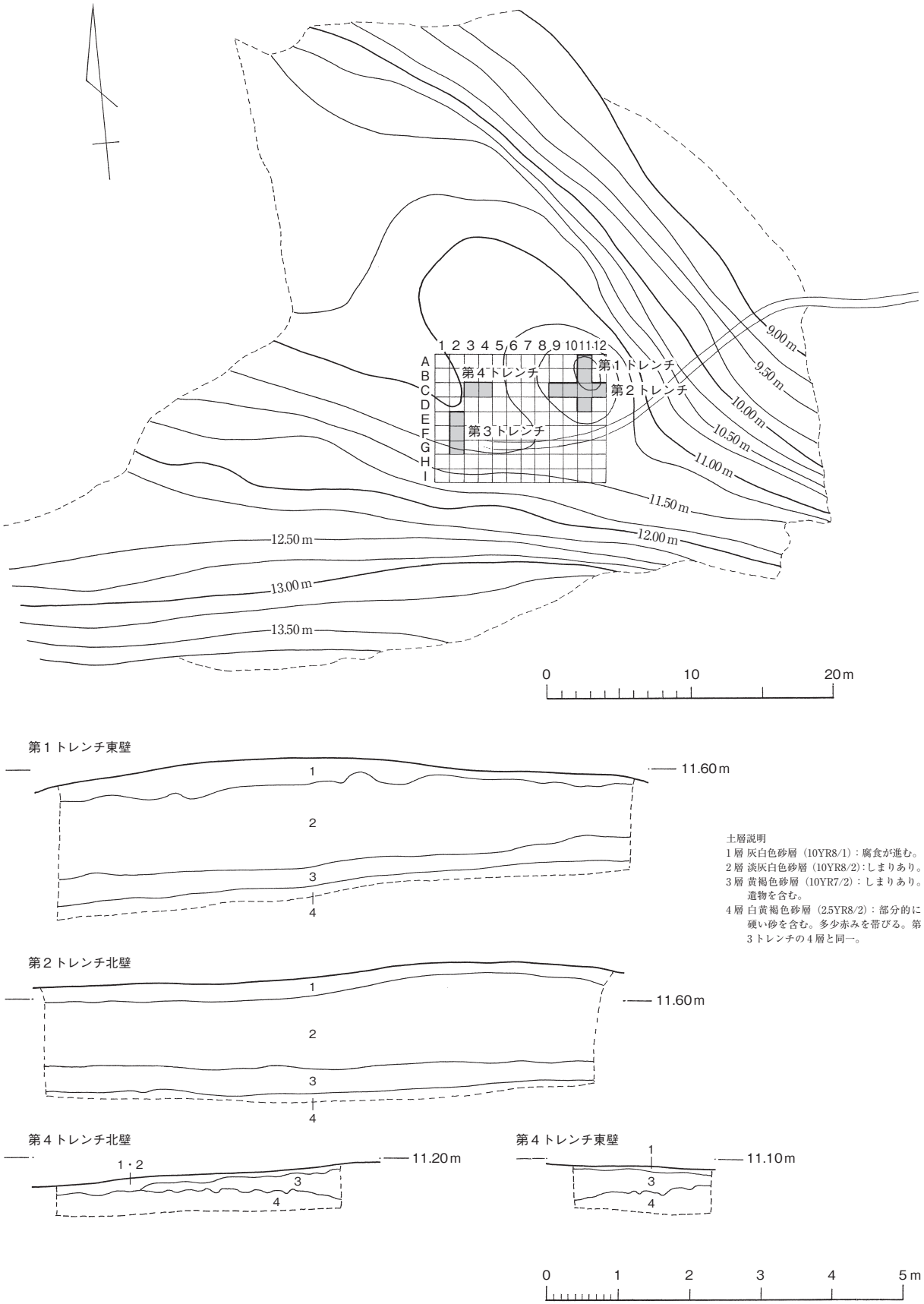


図９　大池Ｃ遺跡地形測量および調査区とトレンチ土層断面

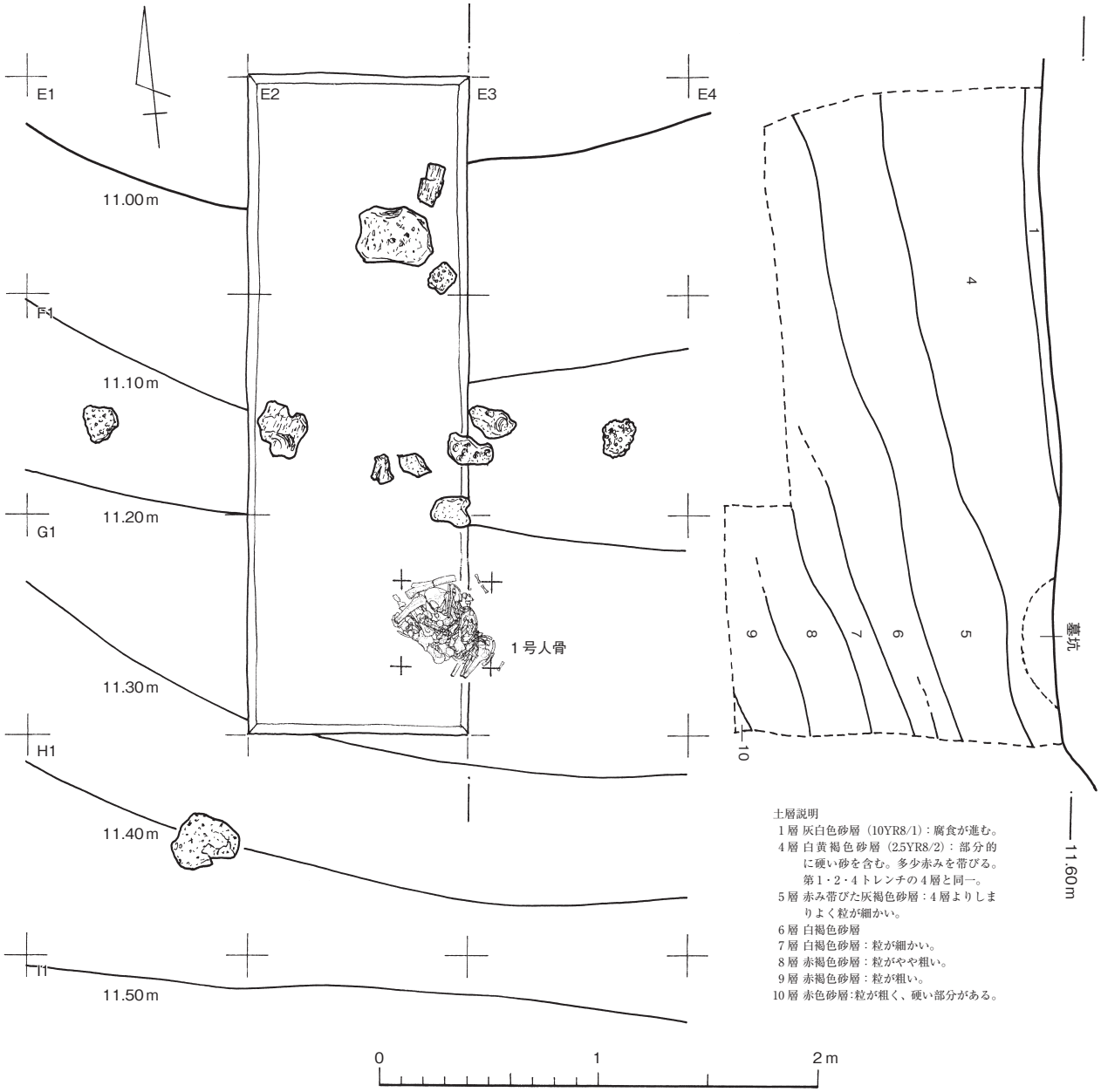


図 10　大池 C 遺跡第 3 トレンチ平面と土層断面

に 11 個，南側の H1 区に 1 個ビーチロックが置かれたようにあり（図 10・図版 6-2），B 遺跡の石棺墓を連想させた。そこで掘り進めると，かつて青年団の方が露出させたものと思われる人骨が G2 区と G3 区の間から出土した（図 10）。そこで人骨の周囲に遺り方を組み，人骨片に 1 点ずつ番号を付して図面を描いたのちにレベルをはかって取り上げた。

マウンドの第 1・2 トレンチを発掘した結果，埋葬跡は確認できなかったが，遺物の包含層を検出した。トレンチの堆積土は 4 層からなる。地表下およそ 60cmにある厚さ 20cmほどの黄褐色の砂層である 3 層は，土器，陶器，鉄器などの遺物を含んでいた。

この遺物包含層がどのように広がっているのか，さらに人骨と包含層との関係はどのようなものか明らかにするために，人骨が出土した第3トレンチの東北に第4トレンチを設けて発掘調査した。その結果，3 層は東西方向では C3 区で途切れ（図 9），南側ではおそらく D 区で途切れて人骨まで

遺物包含層はのびていないことが明らかになった。また，人骨を取りあげたのちにそれを断ち切るようにしてE2，F2，G2区を発掘したがやはり3層は認められなかった（図10）。しかし，人骨の発掘調査に伴っておこなった第3トレンチの発掘調査によってG2区とトレンチ東側のF3，G3区から土器や陶器の破片がわずかに出土し，人骨の時期を考えるてがかりが得られた。

（2）集骨の発掘調査

集骨の堆積状況　1号人骨はおよそ50 × 35cmの範囲に1体分が集積された状態で出土した。集積の平面形態は，おおむね長方形をなしている。人骨は重なり合っているので，3枚の図面に整理した（図11～13）。人骨は1片ずつ番号をつけて取り上げたが，図11B～13Bにそれを示した。これらの図と表1にもとづきながら，人骨のおもな集積状況について述べる。

最下部，すなわち最初期段階の集骨（図11・図12）は肋骨（167・179・181・182・190・192～196・198～201）であり，10本ほど束にして置いている。そのかたわらに右上腕骨（186）と右脛骨遠位（188）をX状に置き，その上に椎骨を置く。椎骨（166a～166g・168・178・180）は第1～第9胸椎であり，解剖学的な連結状態を保っている。この連結した胸椎にわずかに重ねるようにして頭蓋骨の後半分（113）を置くが，これを一種の容器のようにして，その中に下顎骨（159・160）と上顎骨（図12-149・152）を割り置き，側頭骨や頭蓋骨片（156・157）もここに集中して入れている。これらは集骨の中央部に位置しており，さらに左寛骨（111・146）を割って重ねてかたわらに置いた。

頭蓋骨の前半分（113）は後半分の上に載せられており，蓋をしたようなかたちになっている（図13）。これら中央に配置した骨群の上や南西にさらに左上腕骨近位（82），左肩甲骨（122），肋骨や指骨，椎骨などが加えられ，それらを囲むようにして長骨である上腕骨（105），橈骨（126），大腿骨（89・140・142・145），脛骨（103・104）をコの字形にして肩甲骨（107）や寛骨（106）を挟み込みながら配置している。

接合状況　この集骨の特徴は，頭蓋骨と長骨，寛骨などを割って配置している点である。図14に主要な骨の接合関係を示し，表1にすべて提示した。左大腿骨（140・145）は分割された個体が隣どうしになっているが，それ以外の右大腿骨（89・142），左脛骨（74・103・128），右脛骨（104・188），左橈骨（147・153・187），右橈骨（126・143），右腓骨（78・88・141・150）などほとんどの長骨は2ないし3つに分割して離して配置しており，意図的な措置と言えるだろう。

上顎骨（149・152）と下顎骨（159・160）はそれぞれ正中線で二つに分割したものが接合するが，これは離れ離れにせずに頭蓋骨の中に一緒に納めており，頭の骨はひとまとまりにするという，これも意図的な措置と言えよう。

墓坑の掘り方　砂丘であり，墓坑の掘り方は確認できなかった。しかし，図11～13の人骨の見通し図および図10の土層断面図で明らかなように，最深で15 cmほどのなだらかな掘り込みが再現できる。寛骨の146や脛骨の188は斜めになっているが，土坑底に埋置されたものであり，土坑底の傾斜と合致しているのであろう。

（設楽）

表１　大池Ｃ遺跡出土遺物一覧

遺物番号	人骨部位	左右	接合関係	挿図番号	備考
1	手骨　中手骨遠位 1/3			—	黒色化
2	雑骨			—	
3	雑骨（前腕骨片？　肋骨片？）			—	
4	K			—	
5	足骨　立方骨	左		—	
6	歯　下顎中切歯	右		—	黒色化
7	手骨　中手骨			—	黒色化
8	軽石			—	
9	サンゴ			—	
10	礫			—	
11	手骨　中手骨遠位 1/3			—	黒色化
12	土器			—	
13	雑骨			—	白色化
14	陶器			—	
15	雑骨			—	
16	サンゴ			—	
17	サンゴ			—	
18	膝蓋骨	右		—	黒色化
19	土器			—	
20	土器			—	
21	手骨　中節骨Ⅳ	右		—	
22	手骨　中節骨？　近位			—	
23	雑骨　指骨片？			—	
24	手骨　基節骨Ⅴ	左？		—	
25	足骨　中足骨Ⅱ　近位 1/2	右		—	
26	肋骨			—	
27	雑骨　腸骨翼片？			—	
28	脛骨　遠位端	左	74 と接合	—	
29	手骨？　中手骨Ⅴ？　骨体？			—	
30	青磁			—	
31	肋骨？			—	
32	頭蓋　上顎骨前頭突起片	右	152 と接合	—	
33	雑骨　指骨？			—	
34	肋骨			—	
35	雑骨　肋骨片？			—	
36	足骨　踵骨関節面？			—	
37	手骨　中節骨Ⅱ	左		—	
38	K			—	
39	雑骨　肩甲骨片？			—	
40	S			—	
41	足骨　中節骨Ⅴ？	左		—	
42	足骨　中足骨体？			—	
43	手骨　大菱形骨？			—	
44	雑骨　腸骨翼片？			—	
45	B			—	
46	雑骨　腸骨？			—	
47	雑骨			—	
48	サンゴ			—	
49	手骨　月状骨	左		—	
50	骨			—	
51	歯　下顎中切歯	左		—	歯石付着
52	足骨　舟状骨	右		—	
53	骨			—	
54	歯　下顎第２大臼歯			—	
55	雑骨　肋骨片？			—	
56	足骨　距骨片	右		—	
57	頭蓋　側頭骨頬骨突起	左	163 と接合	—	
58	B			—	
59	腰椎片			—	
60	手骨　基節骨Ⅰ　遠位 1/2	右		—	
61	手骨　末節骨Ⅲ	右		—	
62	足骨　中足骨体？			—	
63	雑骨			—	
64	土器			—	
65	礫			—	
66	足骨　外側楔状骨	左		—	
67	大腿骨　遠位端	右		—	
68	手骨　中節骨Ⅲ	左		—	
69	上腕骨　骨頭	左		図 13	
70	手骨　基節骨Ⅱ	右		図 13	
71	手骨　中手骨Ⅰ	右		図 13	
72	雑骨　仙骨片？			図 13	
73	雑骨			図 13	
74	脛骨　遠位 1/3	左	28・103 と接合	図 13	
75	頭蓋片			図 13	
76	肋骨　Ⅻ？			図 13	
77	腓骨　遠位 1/2	左		図 13	
78	腓骨　遠位 1/3	右	88・141・150 と接合	図 13	
79	肋骨　肋骨頭	左	117 と接合	図 13	
80	肋骨	左		図 13	
81	肋骨　骨体近位 1/4	左		図 13	
82	上腕骨　近位骨体 1/2	左	105 と接合	図 13	
83	手骨　基節骨Ⅲ	右？		図 13	
84	椎骨片？			図 13	
85	足骨　距骨	左		図 13	
86	足骨　内側楔状骨	左		図 13	
87	足骨　中足骨Ⅴ　近位 2/3	右		図 13	
88	腓骨　骨体 1/2	右	78・141・150 と接合	図 13	
89	大腿骨　近位 2/5	右	142 と接合	図 13	
90	肋骨　／　鎖骨	右		図 13	
91	肋骨	右	167 と接合	図 13	
92	鎖骨　／　肋骨	左		図 13	
93	鎖骨　胸骨側 1/4	右	90 と接合	図 13	
94	肋骨			図 13	
95	鎖骨　肩峰端		90 と接合	図 13	
96	手骨　中手骨Ⅲ	左		図 13	
97	頭蓋片　前頭骨片？			図 12	
98	胸椎　Th10			図 13	
99	頸椎　C2			図 13	
100	尺骨　骨体 1/10	右	138・202 と接合	図 12	
101	足骨　踵骨片	左	132 と接合	図 13	
102	腸骨翼片？			図 13	
103	脛骨　近位 2/3	左	74・128 と接合	図 13	
104	脛骨　近位 1/2	右	188 と接合	図 13	
105	上腕骨　遠位 1/2	左	82 と接合	図 13	
106	寛骨	右		図 13	4 個の破片
107	肩甲骨　関節窩	右	176 と接合	図 13	
108	仙骨　耳状面上部	左		図 13	
109	肋骨	左		図 13	
110	肋骨　Ⅱ？	右		図 12・13	
111	寛骨　寛骨臼	左	146 と接合	図 12・13	
112	足骨　中足骨Ⅲ	左		図 12	
113	頭蓋片（a ～ v）			図 11・12・13	
114	肋骨			図 12	
115	蝶形骨　大翼	右		図 13	
116	鎖骨　胸骨端 1/5	左	144 と接合	図 13	骨端未癒合
117	肋骨	左	79 と接合	図 13	
118	肋骨　Ⅰ	左		図 13	
119	肋骨	左		図 13	
120	頭蓋片　後頭骨片		121 と接合	図 13	

遺物番号	人骨部位	左右	接合関係	挿図番号	備考
121	頭蓋片　後頭骨片		120と接合	図13	
122	肩甲骨　関節窩	左		図13	
123	寛骨　腸骨棘？			図13	
124	肋骨　Ⅰ	右		図13	
125	頸椎　C1			図13	
126	橈骨　近位1/2	右	143と接合	図13	
127	足骨　中足骨　Ⅰ　近位片1/3			—	99・122の下
128	脛骨　近位端片	左	103と接合	図13	
129	肋骨			図13	
130	肋骨	右		—	106の下
131	寛骨　腸骨稜片			図13	
132	足骨　踵骨片	左	101と接合	図13	
133	肋骨			図13	
134	尺骨　近位2/5	左	164と接合	—	74の下
135	寛骨　腸骨翼片			—	74の下
136	足骨　舟状骨	左		—	74の下
137	雑骨			—	74の下
138	尺骨　遠位3/10	右	100・202と接合	—	74の下
139	足骨　中足骨Ⅳ　近位1/2	右		図13	
140	大腿骨　近位1/3	左	145と接合	図13	
141	腓骨　骨体1/2	右	78・87・150と接合	図12	
142	大腿骨　遠位3/5	右	89と接合	図13	
143	橈骨　遠位1/2	右	126と接合	図12	
144	鎖骨　肩峰側4/5	左	116と接合	図12	
145	大腿骨　遠位2/3	左	140と接合	図13	
146	寛骨　腸骨部	左	111と接合	図12・13	
147	橈骨　近位1/4	左	153・187と接合	図13	
148	肋骨			図12	
149	上顎骨（左）・頭蓋片・頬骨		152と接合	図12	
150	腓骨　近位1/3	右	78・87・141と接合	図12・13	
151	肋骨片	右		図12	
152	頭蓋片　・　上顎骨（右）		32・149・113と接合	図12	
153	橈骨　近位1/4	左	147・187と接合	図12・13	
154	雑骨			図12	
155	雑骨			図12	
156	側頭骨（右）　・　頭蓋片			図11・12	
157	頭蓋片			図12	
158	仙骨　骨体			図12	
159	下顎骨（右半分）		160と接合	図11・12	
160	下顎骨（左半分）		159と接合	図11	
161	頭蓋片			図12	
162	肋骨片	右		図12	
163	側頭骨	左		図12	
164	尺骨　遠位3/5	左	134と接合	図13	
165	雑骨			図12	
166	胸椎　a:Th1 b:Th2 c:Th3 d Th4 e:Th5 f:Th6 g:Th7			図11・12	
167	肋骨	右		図12・13	
168	胸椎　Th11　／　手骨　基節骨Ⅰ	右		図12・13	
169	頸椎　C7			図12	
170	足骨　立方骨	右		図11	
171	頸椎　C6			図11・12	
172	手骨　中手骨Ⅱ	左		図12	
173	手骨　中節骨Ⅱ	右		図12	
174	手骨　基節骨Ⅰ	左		図12	
175	頸椎　C3			図11・12	
176	肩甲骨　肩峰	右		図12	

遺物番号	人骨部位	左右	接合関係	挿図番号	備考
177	手骨　中手骨Ⅳ	左		図12	
178	胸椎　Th8			図11・12	
179	肋骨片	右		図12	
180	胸椎　Th9			図11	
181	肋骨	右		図11・12	
182	肋骨	右		図11・12	
183	足骨　中足骨Ⅳ　近位1/3	左		—	113の下
184	頸椎　C4			図11・12	
185	手骨　有鉤骨	右		図11	
186	上腕骨	右		図11・12	
187	橈骨　遠位1/2	左	147・153と接合	図11・12	
188	脛骨　遠位1/2	右	104と接合	図11・12・13	
189	腰椎			—	166 d ～ f の下
190	肋骨片	右		図11	
191	雑骨			図12	
192	肋骨	右		図11・12	
193	肋骨片	右	195と接合	図11	
194	肋骨片	右		図11・12	
195	肋骨片	右	193と接合	図11	
196	肋骨	右		図11・12	
197	手骨　中節骨Ⅱ	右		図12	
198	肋骨片	右		—	186の下
199	肋骨片	左		図11・12	
200	肋骨	左		—	186の下
201	肋骨	左		図11	
202	尺骨　近位3/5	右	100・138と接合	—	181・182・196などの下
203	胸椎　Th12			—	166 f・g の下
204	腰椎			—	113の下
205	手骨　中節骨Ⅲ	右		—	
206	上顎中切歯	左		—	
207	?			—	
208	手骨　中手骨Ⅲ	右		—	
209	足骨　基節骨Ⅴ	左		—	

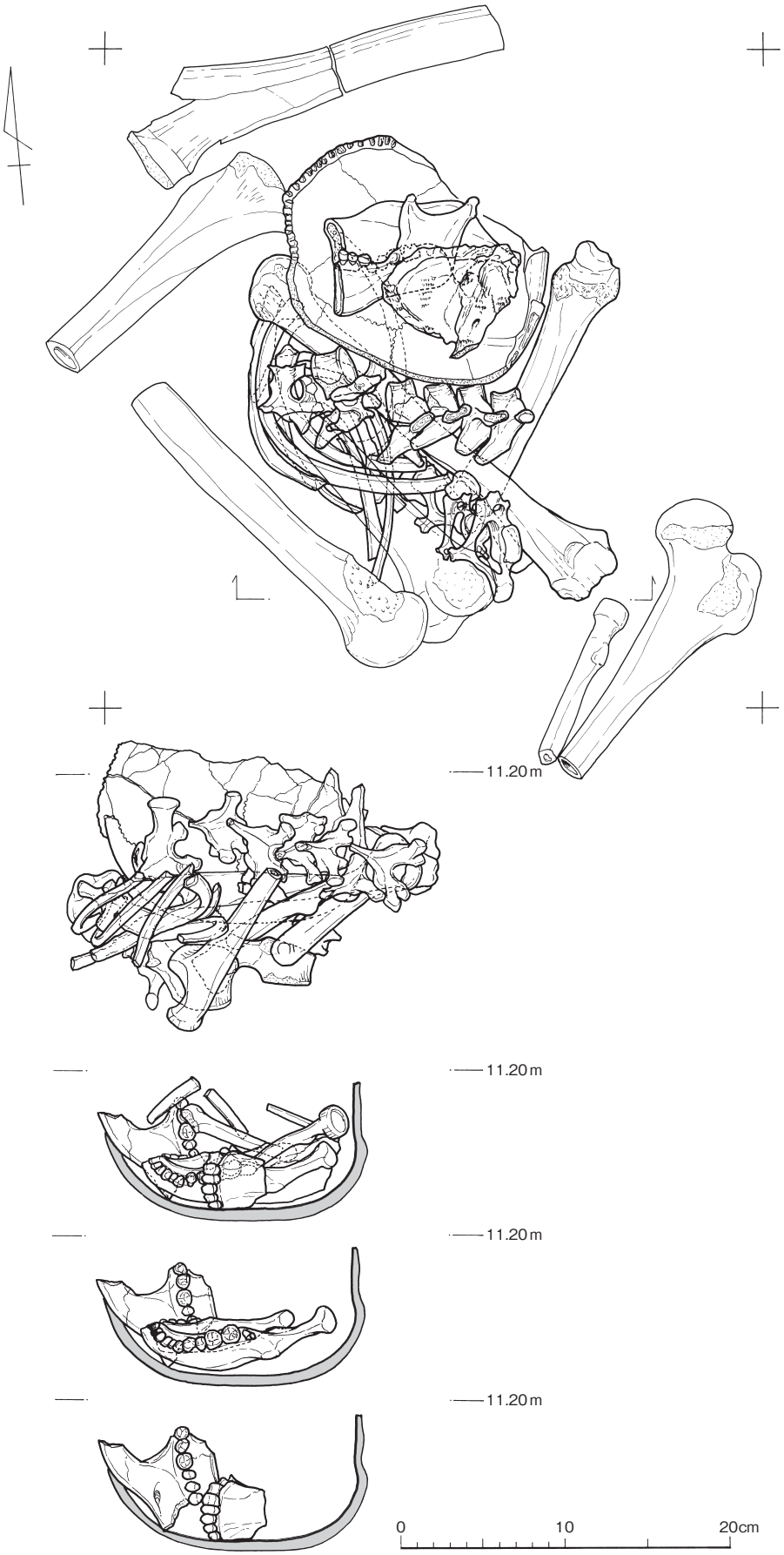
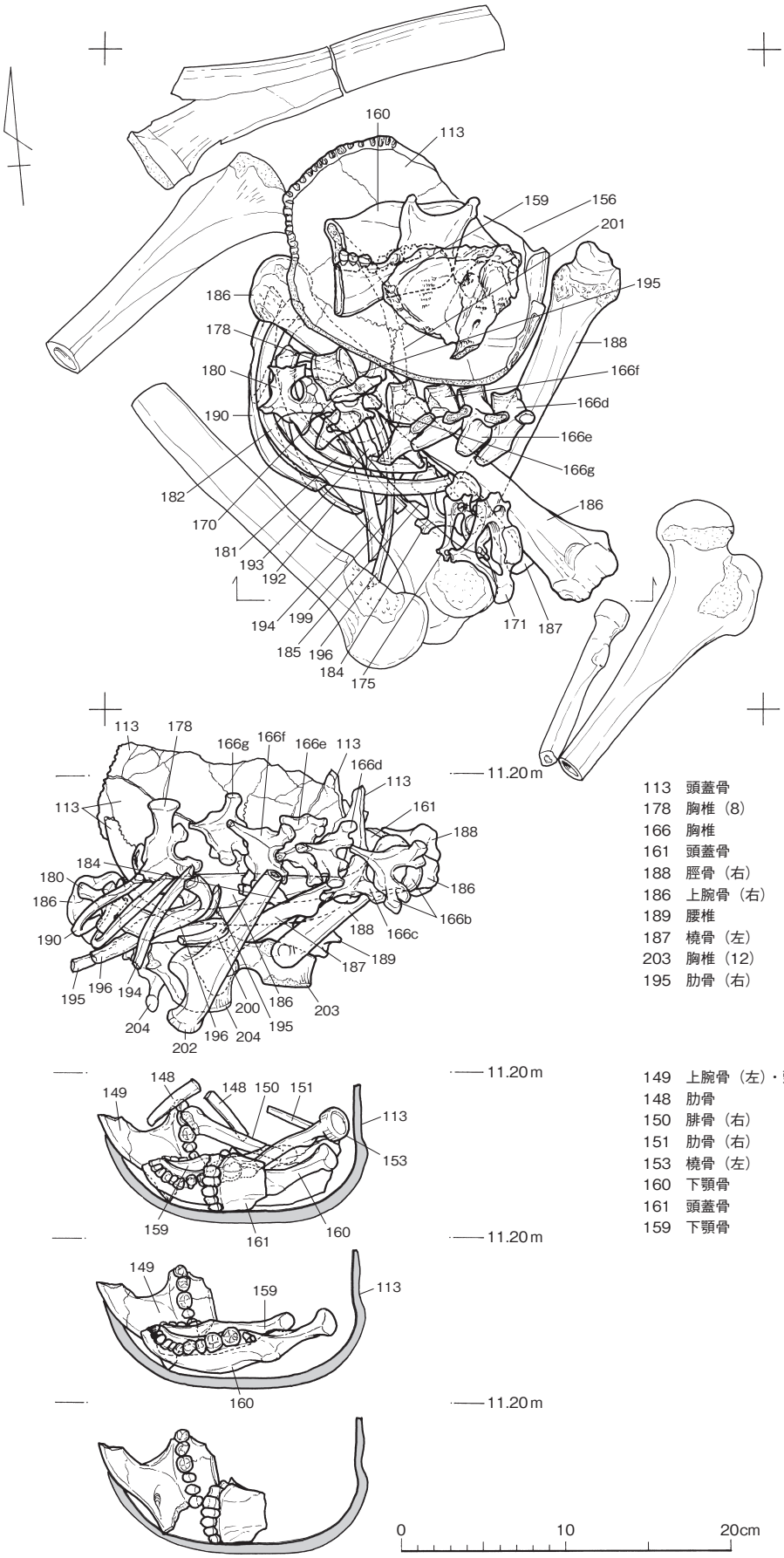


図 11A　大池 C 遺跡 1 号人骨出土状況（1）



人骨の部位（右回り）
160　下顎骨
113　頭蓋骨
159　下顎骨
156　側頭骨（右）
201　肋骨（左）
195　肋骨（右）
188　脛骨（右）
166　胸椎
186　上腕骨（右）
187　橈骨（左）
171　頸椎（6）
175　頸椎（3）
184　頸椎（4）
196　肋骨（右）
185　手骨（右）
199　肋骨（左）
194　肋骨（右）
192　肋骨（右）
193　肋骨（右）
181　肋骨（右）
170　足骨（右）
182　肋骨（右）
190　肋骨（右）
180　胸椎（9）
178　胸椎（8）

113　頭蓋骨
178　胸椎（8）
166　胸椎
161　頭蓋骨
188　脛骨（右）
186　上腕骨（右）
189　腰椎
187　橈骨（左）
203　胸椎（12）
195　肋骨（右）
200　肋骨（左）
204　腰椎
196　肋骨（右）
202　尺骨（右）
194　肋骨（右）
195　肋骨（右）
190　肋骨（右）
180　胸椎（9）
184　頸椎（4）

149　上腕骨（左）・頭蓋骨
148　肋骨
150　腓骨（右）
151　肋骨（右）
153　橈骨（左）
160　下顎骨
161　頭蓋骨
159　下顎骨

図 11B　大池 C 遺跡 1 号人骨番号（1）

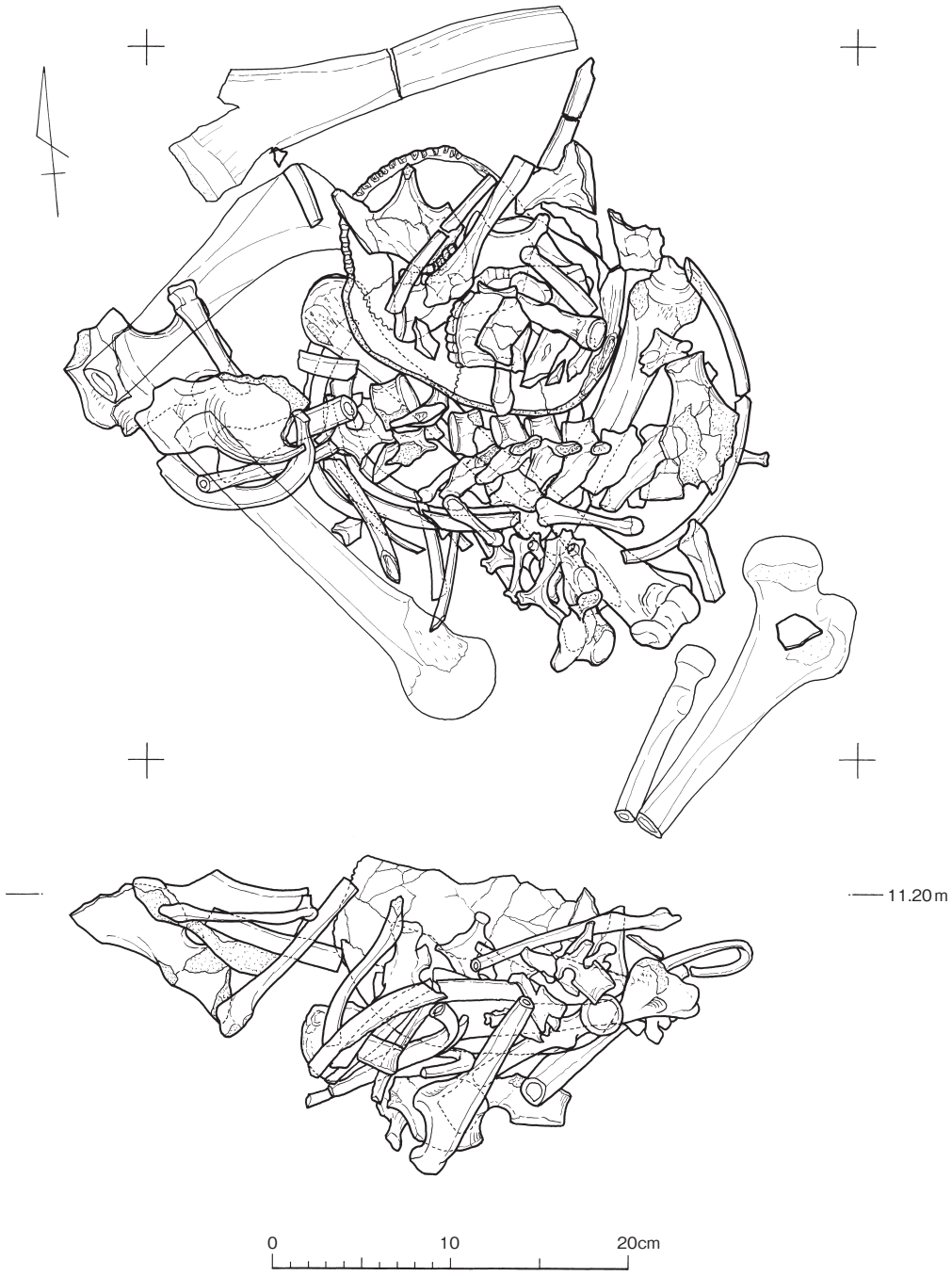
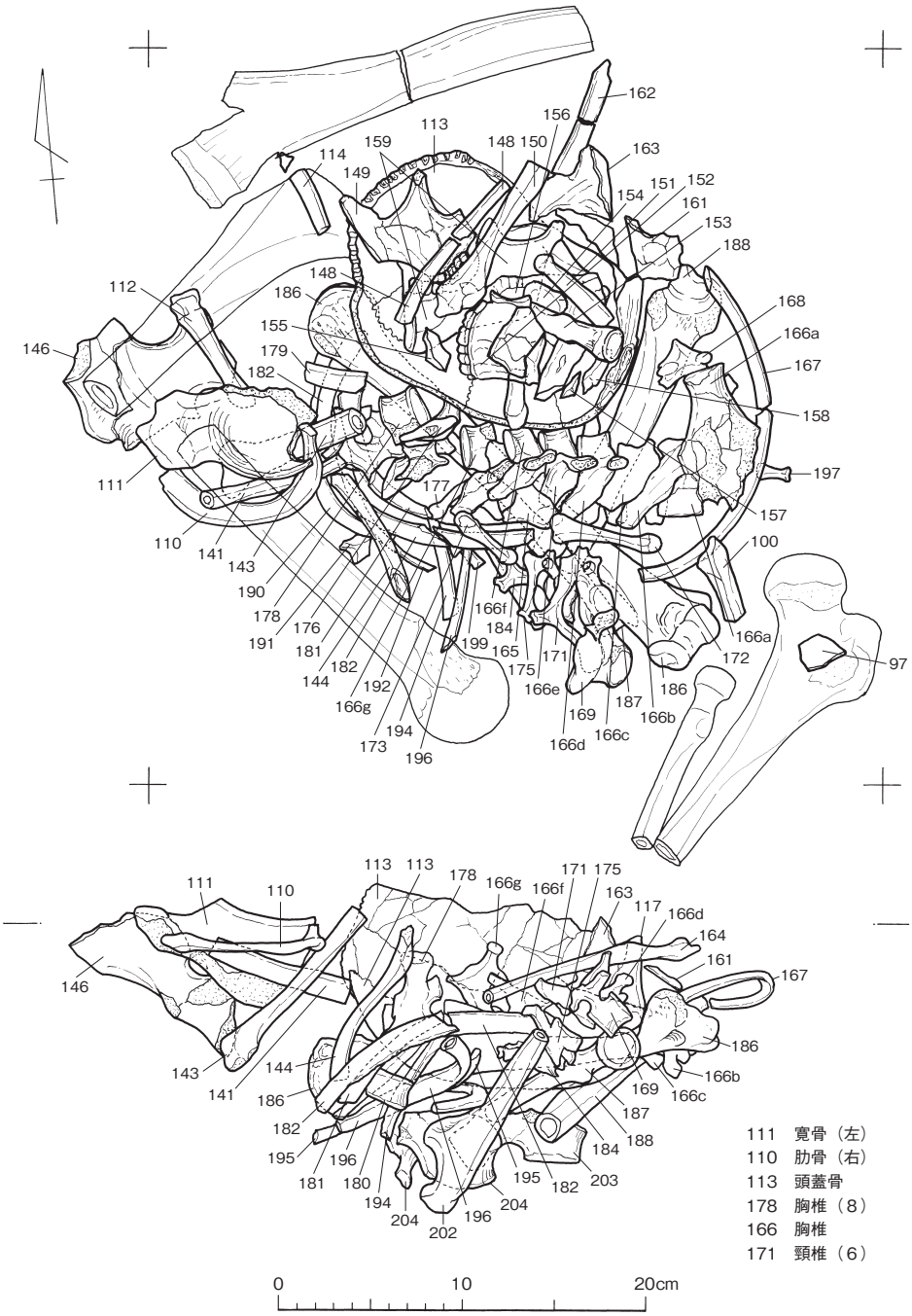


図 12A　大池 C 遺跡 1 号人骨出土状況（2）



人骨の部位（右回り）
162　肋骨（右）
163　側頭骨（左）
154　雑骨
151　肋骨（右）
152　頭蓋骨・上顎骨（右）
161　頭蓋骨
153　橈骨（左）
188　脛骨（右）
168　胸椎（11）・手骨（右）
166　胸椎
167　肋骨（右）
158　仙骨
197　手中節骨（右）
157　頭蓋骨
100　尺骨（右）
97　頭蓋骨
172　中手骨（左）
186　上腕骨（右）
187　橈骨（左）
169　頸椎（7）
171　頸椎（6）
175　頸椎（3）
165　雑骨
184　頸椎（4）
199　腰椎
177　中手骨（左）
196　肋骨（右）
194　肋骨（右）
173　手中節骨（右）
192　肋骨（右）
182　肋骨（右）
144　鎖骨（左）
181　肋骨（右）
176　肩甲骨（右）
191　雑骨
178　胸椎（8）
190　肋骨（右）
143　橈骨（右）
141　腓骨（右）
110　肋骨（右）
111　寛骨（左）
146　寛骨（左）
112　中足骨（左）
182　肋骨（右）
179　肋骨（右）
155　雑骨
149　上顎骨（左）・頭蓋骨
114　肋骨
159　下顎骨
113　頭蓋骨

175　頸椎（3）
163　側頭骨（左）
117　肋骨（左）
164　尺骨（左）
161　頭蓋骨
167　肋骨（右）
186　上腕骨（右）
169　頸椎（7）
187　橈骨（左）
188　脛骨（右）
184　頸椎（4）
203　胸椎（12）
182　肋骨（右）
195　肋骨（右）
204　腰椎
196　肋骨（右）
202　尺骨（右）
194　肋骨（右）
180　胸椎（9）
196　肋骨（右）
181　肋骨（右）
182　肋骨（右）
144　鎖骨（左）
141　腓骨（右）
143　橈骨（右）
146　寛骨（左）

111　寛骨（左）
110　肋骨（右）
113　頭蓋骨
178　胸椎（8）
166　胸椎
171　頸椎（6）

図 12B　大池 C 遺跡 1 号人骨番号（2）

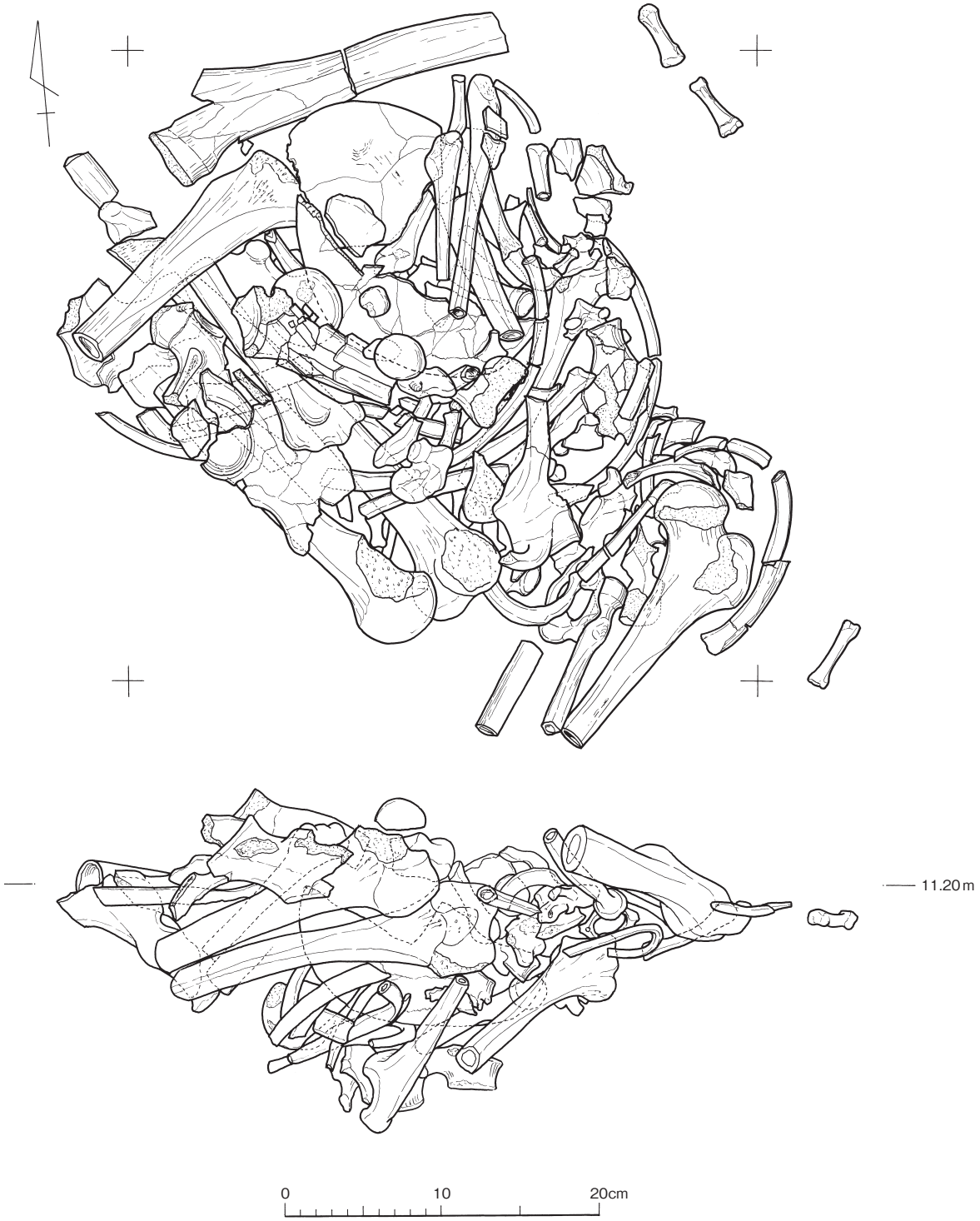


図 13A　大池 C 遺跡 1 号人骨出土状況（3）

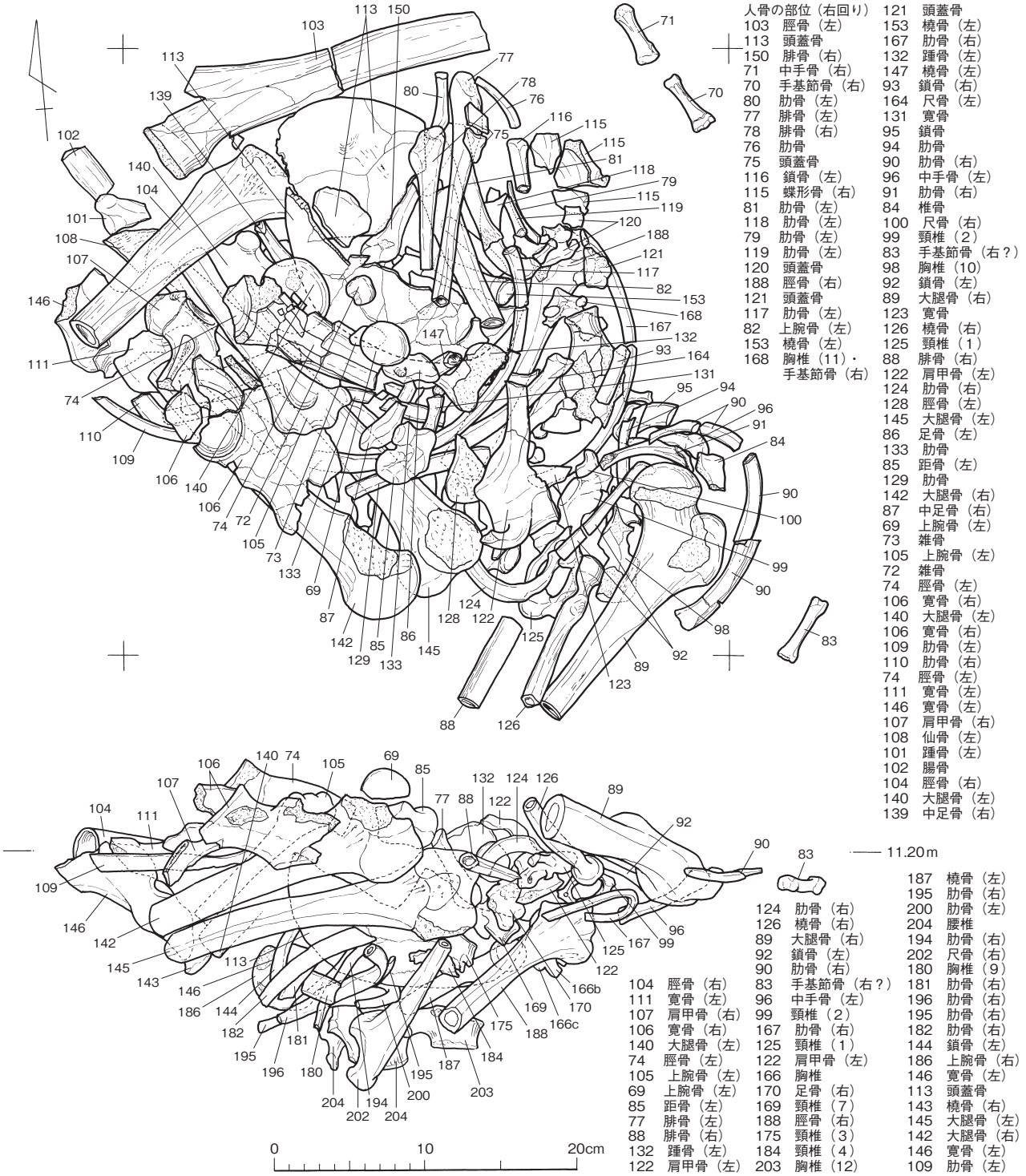
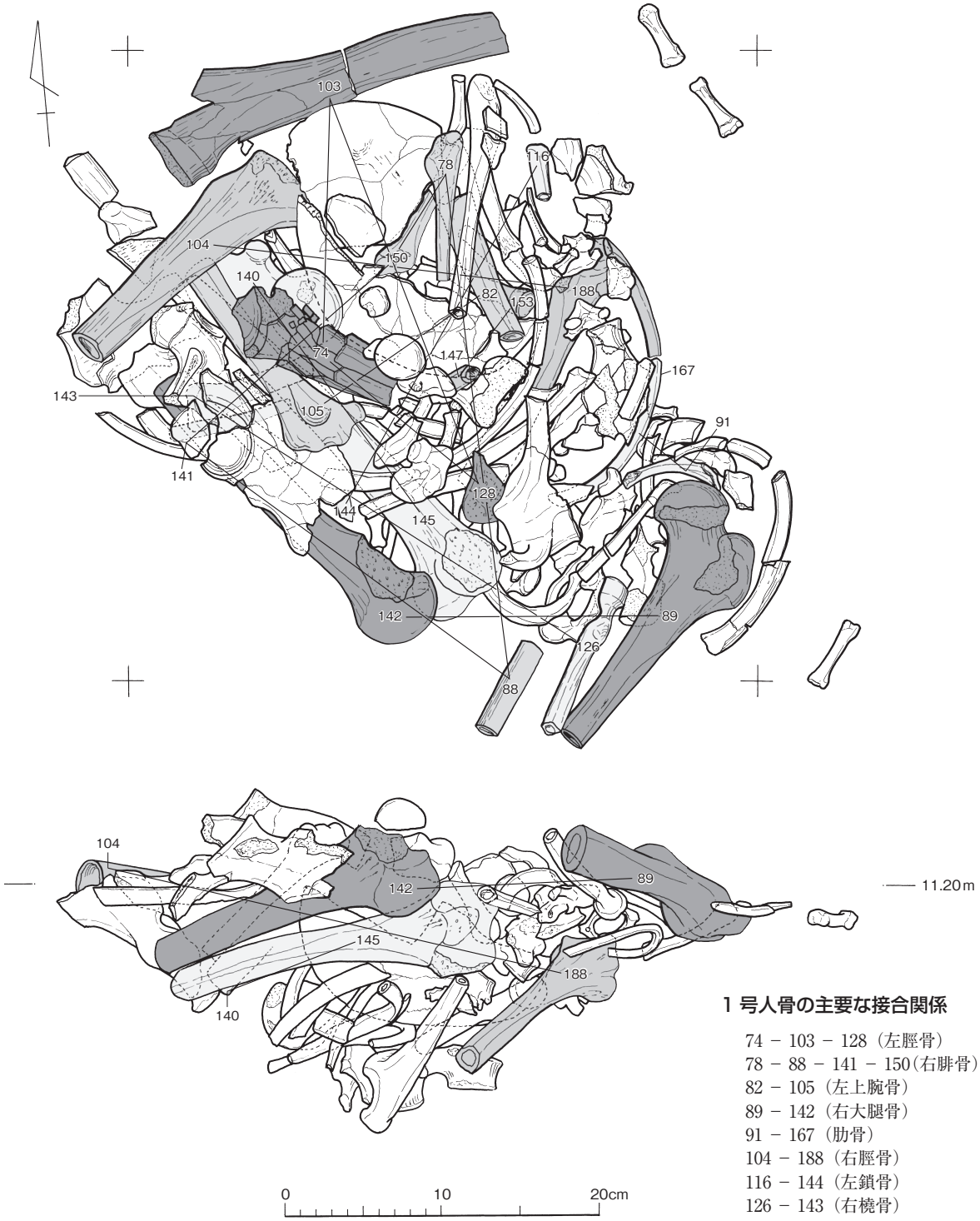


図 13B　大池 C 遺跡 1 号人骨番号（3）



１号人骨の主要な接合関係

74 － 103 － 128（左脛骨）
78 － 88 － 141 － 150（右腓骨）
82 － 105（左上腕骨）
89 － 142（右大腿骨）
91 － 167（肋骨）
104 － 188（右脛骨）
116 － 144（左鎖骨）
126 － 143（右橈骨）
140 － 145（左大腿骨）
147 － 153 － 187（左橈骨）

図 14　大池Ｃ遺跡１号人骨の主要な接合関係

(3) 出土人骨

① 分析の方法

頭蓋の計測は，Martinの定義［Martin and Knussmann, 1988; 馬場，1991］に，顔面平坦度計測はYamaguchiの方法［Yamaguchi, 1973］により計測を行った。頭蓋最大長，頭蓋最大幅，バジオン・ブレグマ高，中顔幅，顔高，眼窩幅，眼窩高，鼻幅，鼻高の頭蓋計測値9項目から，ペンローズの形態距離［Constandse-Westermann, 1972］を計算した。比較に用いた資料は大池B遺跡1号人骨（女性・熟年），徳之島面縄第1貝塚出土人骨（女性・老年），奄美大島宇宿貝塚出土人骨（女性・壮年），種子島広田人，本土の津雲・吉胡縄文人，奄美大島宇宿貝塚東地区2号人骨（女性・壮年）および中筋川トゥール墓跡人骨（徳之島近世人骨）である。

② 人骨の概要

大池C遺跡から出土した1号人骨は，解剖学的位置関係を保っているのは胸椎だけで，再葬人骨である。出土した各骨の部位同定を行い，複数体の人骨が混ざっているのか確認を行ったが，再葬されていたのは1体分であった（図15・図版8・表2）。頭蓋から，手の指先，足の指先まで，各骨がよく集められている。所属年代は，現在のところ不明である。

本人骨の性別は寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と判定される。年齢は寛骨耳状面

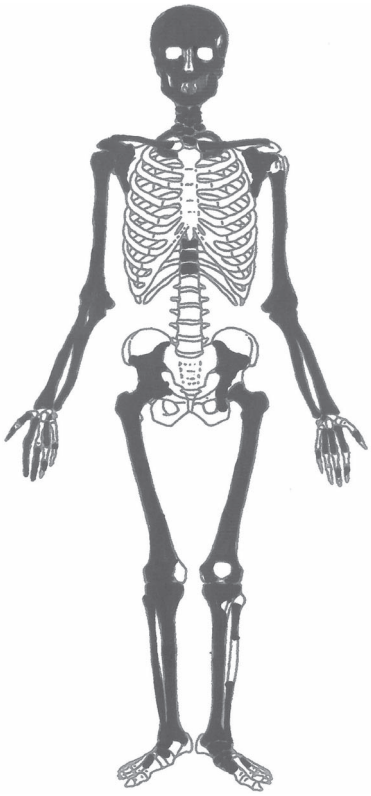


図15　大池C遺跡1号人骨の残存部位
（ただし，助骨・椎骨については，遺存するすべての骨の部位に黒塗りをおこなっていない）

表2　大池C遺跡1号人骨の遺存状況
（＋：遺存）

頭蓋			＋	
体幹骨	脊柱	頸椎	＋	
		胸椎	＋	
		腰椎	＋	
		仙骨		
		尾骨		
	胸郭	胸骨		
		肋骨	＋	＋
			R	L
上肢骨	上肢帯	肩甲骨	＋	＋
		鎖骨	＋	＋
	自由上肢骨	上腕骨	＋	＋
		橈骨	＋	＋
		尺骨	＋	＋
		手根骨	＋	＋
		中手骨	＋	＋
		手の指骨	＋	＋
			R	L
下肢骨	下肢帯	寛骨	＋	＋
	自由下肢骨	大腿骨	＋	＋
		膝蓋骨	＋	
		脛骨	＋	＋
		腓骨	＋	＋
		足根骨	＋	＋
		中足骨	＋	＋
		足の指骨	＋	＋

表３　大池Ｃ遺跡１号人骨の頭蓋主要計測値（mm）及び示数

M No.		脳頭蓋	M No.		顔面頭蓋
1	頭蓋最大長	176	45	頬骨弓幅	((128))
8	頭蓋最大幅	132	46	中顔幅	99
9	最小前頭幅	100	47	顔高	114
10	最大前頭幅	114	48	上顔高	68
11	両耳幅	121	51	眼窩幅（左）	((38))
12	最大後頭幅	102	52	眼窩高（左）	41
23	頭蓋水平周	499		眼窩高（右）	37
24	横弧長	293	54	鼻幅	24
25	正中矢状弧長	359	55	鼻高	50
26	正中矢状前頭弧長	127		NLH 鼻高	24.5
27	正中矢状頭頂弧長	126	43	上顔幅	106
28	正中矢状後頭弧長	106	44	両眼窩間幅	100
29	正中矢状前頭弦長	108			
30	正中矢状頭頂弦長	111	72	全側面角	77
31	正中矢状後頭弦長	90	73	鼻側面角	79
			74	歯槽側面角	65
8/1	頭蓋長幅示数	75.0			
26/25	前頭矢状弧示数	35.4	47/45	Kollmann 顔示数	((89.1))
27/25	頭頂矢状弧示数	35.1	47/46	Virchow 顔示数	115.2
28/25	後頭矢状弧示数	29.5	48/45	Kollmann 上顔示数	((53.1))
29/26	矢状前頭示数	85.0	48/46	Virchow 上顔示数	68.7
30/27	矢状頭頂示数	88.1	52/51	眼窩示数（左）	90.2
31/28	矢状後頭示数	84.9	54/55	鼻示数	48.0
			65	下顎関節突起幅	123
			65（1）	下顎筋突起幅	90
			66	下顎角幅	93
			69	ｵﾄｶﾞｲ高	(34)
			70	下顎枝高（左）	31
			71	下顎枝幅（左）	11
			68（1）	下顎長	101
			79	下顎枝角（左）	127
			71/70	下顎枝示数（左）	54.8
			［顔面平坦度］	前頭骨弦	97.4
				前頭骨垂線	16.7
				前頭骨平坦示数	17.2
				頬上顎骨弦	98.9
				頬上顎骨垂線	22.4
				頬上顎骨平坦示数	22.7

の形状，上腕骨の近位端に癒合線が認められること，鎖骨近位端が未癒合であることから 20 歳を過ぎたばかりの壮年と判定される。

③　計測，観察および分析の結果

大池Ｃ遺跡１号人骨（女性・壮年）の頭蓋の計測値および示数を表３に示す。表４に頭蓋形態小変異の出現の有無を，表５に体肢骨の計測値および示数を示す。

頭蓋計測値および示数　頭蓋計測値と示数について，大池Ｃ遺跡１号人骨と比較集団との比較（表6）を行い，次の結果が得られた。最大長が長く（176 mm），最大幅が小さい（132 mm）。それにより，頭蓋長幅示数は中頭（75.0）を示す。顔面部は頬骨弓幅や中顔幅が小さく，上顔高・顔高が高い。そのため，高・狭顔（Kollmann 顔示数:((89.1))，Kollmann 上顔示数:((53.1))）を示す。眼窩部，

表４　大池Ｃ遺跡１号人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

	右	左		右	左
ラムダ小骨	-		横頬骨縫合痕跡	+	
ラムダ縫合骨	-	-	口蓋隆起	+	
インカ骨	-		外側口蓋管骨橋	-	-
横後頭縫合痕跡	-	-	外耳道骨瘤	-	-
アステリオン小骨	+	-	フシュケ孔	-	-
頭頂切痕骨	-		棘孔開裂	-	-
前頭縫合残存	-		翼棘孔	-	-
眼窩上神経溝	-	-	左側横洞溝優位	R	
眼窩上孔	-	-	副オトガイ孔	-	-
前頭孔	-	-	下顎隆起	-	-
二分頬骨	-		顎舌骨筋神経管	-	-

表５　大池Ｃ遺跡１号人骨の体肢骨主要計測値 (mm) および示数

		＜上肢骨＞				＜下肢骨＞	
M No.		右	左	M No.		右	左
［上腕骨］				［大腿骨］			
1	最大長	300		1	最大長		420
2	全長			2	自然位全長		
5	中央最大径	19	18	6	骨体中央矢状径	25	27
6	中央最小径	15	14	7	骨体中央横径	20	21
7	骨体最小周	55	53	8	骨体中央周	74	77
7a	中央周	57	55	9	骨体上横径	23	26
6/5	骨体断面示数	78.9	77.8	10	骨体上矢状径	23	26
7/1	長厚示数	18.3		8/2	長厚示数		
				6/7	骨体中央断面示数	125.0	128.6
［橈骨］				10/9	上骨体断面示数	100.0	100.0
1	最大長	227	220				
2	機能長	215	211	［脛骨］			
3	最小周	37	37	1	全長		
4	骨体横径	15	14	1a	最大長	348	
5	骨体矢状径	10	10	8	中央最大径	28	27
4a	骨体中央横径	13	13	9	中央横径	20	20
5a	骨体中央矢状径	11	10	10	骨体周	76	76
5(5)	骨体中央周	39	38	8a	栄養孔位最大径	32	31
3/2	長厚示数	17.2	17.5	9a	栄養孔位横径	23	21
5/4	骨体断面示数	66.7	71.4	10a	栄養孔位周	87	82
5a/4a	中央断面示数	84.6	76.9	10b	骨体最小周	72	71
				9/8	中央断面示数	71.4	74.1
［尺骨］				9a/8a	栄養孔位断面示数	71.9	67.7
1	最大長	245	242	10b/1	長厚示数		
2	機能長	216	212				
3	尺骨周	33	33	［腓骨］			
3'	中央周	43	42	1	最大長	340	
11	尺骨前後径	10	10	2	中央最大径	13	
12	尺骨横径	15	15	3	中央最小径	10	
11'	中央最小径	10	10	4	中央周	39	
12'	中央最大径	15	15	4a	最小周	34	
3/2	長厚示数	15.3	15.6	3/2	骨体中央断面示数	76.9	
11/12	骨体断面示数	66.7	66.7	4a/1	長厚示数	10.0	
11'/12'	骨体断面示数	66.7	66.7				

表６　頭蓋主要計測値（mm）及び示数の比較

M No.		宝島 大池 C	宝島 大池 B 縄文	徳之島 面縄貝塚 縄文	奄美大島 宇宿貝塚 弥生	種子島 広田 弥生～古墳	津雲・吉胡 縄文	北部九州 ・山口 弥生	奄美大島 宇宿東２号 中世
1	頭蓋最大長	176	164	165	170	157.7	176.1	176.7	178
8	頭蓋最大幅	132	140	136	149	143.7	141.5	137.9	136
17	ﾊﾞｼﾞｵﾝ・ﾌﾞﾚｸﾞﾏ高		132	130	130	127.7	129.7	130.0	138
8/1	頭蓋長幅示数	75.0	85.4	82.4	87.7	90.9	80.3	78.0	76.4
17/1	頭蓋長高示数		80.5	78.8	76.5	80.5	73.6	73.8	77.5
17/8	頭蓋幅高示数		94.3	95.6	87.3	90.4	91.9	94.7	101.5
5	頭蓋底長		91	95	89	96.4		96.4	100
9	最小前頭幅	100	89	90	-	98.7		93.1	91
23	頭蓋水平周	499	495	486	506	483.6		510.6	502
24	横弧長	293	309	304	317	310.2		304.8	304
25	正中矢状弧長	359	359	352	368	336.0		363.5	378
45	頬骨弓幅	127	135	-	(135)	126.0	132.6	131.4	-
46	中顔幅	99	(102)	98	99	91.4	99.7	100.0	102
47	顔高	106	96	96	112	107.0	105.1	115.1	112
48	上顔高	68	57	61	63	63.3	62.0	69.5	65
47/45	Kollmann 顔示数	((89.1))	71.1	-	(83.0)	81.9	79.2	87.5	-
47/46	Virchow 顔示数	115.2	(94.1)	98.0	113.1	112.3	106.8	115.3	109.8
48/45	Kollmann 上顔示数	((53.1))	42.2	-	(46.7)	48.8	48.0	53.0	-
48/46	Virchow 上顔示数	68.7	(55.9)	62.2	63.6	66.5	62.3	69.5	63.7
51	眼窩幅（左）	41（左）	42（右）	41	43	39.0	41.7	41.6	42
52	眼窩高（左）	37（左）	32（右）	33	33	30.7	32.6	33.9	34
52/51	眼窩示数（左）	90.2（左）	76.1（右）	80.5	76.7	78.9	78.0	81.5	81.0
54	鼻幅	24	27	29	26	24.8	25.4	26.4	26
55	鼻高	50	45	47	50	44.7	44.9	49.6	50
54/55	鼻示数	48.0	60.0	61.7	52.0	57.5	56.1	53.3	52.0
72	全側面角	77	84	76	79	84.7	81.5	83.9	83
74	歯槽側面角	65	67	77	69	65.7	68.7	68.8	63

鼻部とも幅径が小さく，高径が大きい。特に眼窩高の高さは特筆される（37 mm）。高眼窩・狭鼻（眼窩示数（左）：90.2，鼻示数：48.0）を示す。歯槽側面角は 65° と突顎である。顔面平坦度の前頭骨平坦示数は 17.2　と大きく，平坦性ではない。

歯の所見　大池 C 遺跡 1 号人骨の歯式を次に示す。

８７６５４３２○｜１○３４５６７８　　○：歯槽開存
　７６５４○○１｜１○○４５６７⑧　　⑧：顎骨内未萌出

咬合は鋏状である。咬耗は弱く，Martin の 1 度である。う蝕は認められない。

体肢骨計測値および示数　体肢骨計測値と示数について，大池 C 遺跡 1 号人骨と比較集団との比較（表 7･8）を行い，次の結果を得られた。上腕骨はきゃしゃである。前腕も同様の傾向が認められる。大腿骨は骨体中央矢状径が大きく，柱状形成が見られる（骨体中央断面示数：128.6）。

右大腿骨最大長からピアソン式を用いて推定身長を計算すると 154.5 cm と高身長である（表 9）。また，体肢長骨の近遠位長径比をみると，上肢では遠位の橈骨が相対的に短い（表 10）。周径比では，上腕骨や腓骨が太くない。

ペンローズの形態距離　頭蓋計測値 9 項目（Martin's Nos. 1, 8, 17, 46, 47, 51, 52, 54 and 55）から計算したペンローズの形態距離を表 11 に示す。大池 C 遺跡 1 号女性人骨は奄美大島の宇宿貝塚東地

表７　上肢骨主要計測値 (mm) および示数の比較（女性：右側）

M No.		宝島 大池Ｃ	宝島 大池Ｂ 縄文	徳之島 面縄貝塚 縄文	奄美大島 宇宿貝塚 弥生	種子島 広田 弥生～古墳	奄美大島 宇宿東２号 中世
［上腕骨］							
1	最大長	300	260	271	263	269.4	283
2	全長		257	266	259	265.6	277
5	中央最大径	19	23	21	18	22.6	21
6	中央最小径	15	15	16	15	16.6	14
7	骨体最小周	55	58	57	50	61.9	55
7a	中央周	57	63	63	54	65.0	59
6/5	骨体断面示数	78.9	65.2	76.2	83.3	73.6	66.7
7/1	長厚示数	18.3	22.3	21.0	19.0	22.7	19.4
［橈骨］							
1	最大長	227	-	212		198.3	207
2	機能長	215	-	197		190.5	193
3	最小周	37	-	38		36.9	35
4	骨体横径	15	-	16		14.8	15
5	骨体矢状径	10	-	10		10.0	9
4a	骨体中央横径	13	(17)	15		14.8	13
5a	骨体中央矢状径	11	(10)	10		10.3	10
5(5)	骨体中央周	39	(42)	42		-	35
3/2	長厚示数	17.2	-	19.3		20.5	18.1
5/4	骨体断面示数	66.7	-	62.5		68.1	60.0
5a/4a	中央断面示数	84.6	(58.5)	66.7		69.6	76.9
［尺骨］							
1	最大長	245	235	-		215.5	227
2	機能長	215	198	205		192.7	197
3	尺骨周	33	35	-		35.4	34
11	尺骨前後径	10	13	12		11.2	12
12	尺骨横径	15	15	16		10.7	16
3/2	長厚示数	15.3	17.7	-		18.7	17.3
11/12	骨体断面示数	66.7	86.7	75.0		71.5	75.0

区２号人骨（中世）に最も近く，北部九州・山口の弥生人，中筋川トゥール墓跡人骨（徳之島近世人骨）が続く。同じ宝島の大池Ｂ遺跡１号縄文人骨や種子島の広田人骨，徳之島の面縄第１貝塚縄文人骨，本土の縄文人（津雲・吉胡）とは大きく離れる。

（竹中）

（4）出土遺物

大池Ｃ遺跡からは50点ほどの遺物が出土した。大半が第１・２トレンチからの出土である。いずれも小破片であるが、陶器のなかには青磁が含まれており，15世紀のものとわかる。土器は赤褐色で小さな砂礫を含んでおり，15～16世紀のものが大半とみてよい。

第４章１節で述べたように，これらの遺物は第３層に包含されており，第３層は集骨が検出された第３トレンチにはのびていなかった。したがって，これらの遺物によって集骨の年代を決めるわけにはいかないが，第３トレンチからもわずかながら土器と陶器が出土しているので，年代比定の参考になる。また，人骨の形質学的な所見が中世人骨に近いこととも矛盾しない。

（設楽）

表８　下肢骨主要計測値 (mm) および示数の比較（女性：右側）

M No.		宝島 大池Ｃ	宝島 大池Ｂ 縄文	徳之島 面縄貝塚 縄文	奄美大島 宇宿貝塚 弥生	種子島 広田 弥生～古墳	奄美大島 宇宿東２号 中世
［大腿骨］							
1	最大長	420（左）	366	372	370	364.3	394
2	自然位全長		363	370	368	361.0	385
6	骨体中央矢状径	27（左）	26	23	22	22.5	23
7	骨体中央横径	21（左）	23	23	24	22.7	26
8	骨体中央周	77（左）	76	73	71	71.6	75
9	骨体上横径	26（左）	26	28	28	27.0	30
10	骨体上矢状径	26（左）	22	21	20	20.1	21
8/2	長厚示数		20.9	19.7	19.3	20.9	19.5
6/7	骨体中央断面示数	128.6（左）	113.0	100.0	91.7	99.4	88.5
10/9	上骨体断面示数	100.0（左）	84.6	75.0	71.4	74.6	70.0
［脛骨］							
1	全長		(284)	312	309	303.7	309
1a	最大長	348	(291)	319	316	307.3	314
8	中央最大径	28	26	24	23	24.7	27
9	中央横径	20	19	19	18	19.2	20
10	骨体周	76	70	68	10	70.3	72
8a	栄養孔位最大径	32	32	28	27	27.4	29
9a	栄養孔位横径	23	20	20	20	19.8	22
10a	栄養孔位周	87	83	78	73	76.4	80
10b	骨体最小周	72	65	65	61	63.9	67
9/8	中央断面示数	71.4	73.0	79.2	78.3	77.8	74.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	71.9	62.5	71.4	74.0	72.4	75.9
10b/1	長厚示数		22.9	20.8	19.7	21.4	21.7
［腓骨］							
1	最大長	340	-	-		309.0	309
2	中央最大径	13	14（左）	13		14.0	15
3	中央最小径	10	9（左）	9		11.0	12
4	中央周	39	38（左）	37		41.5	45
3/2	骨体中央断面示数	76.9	64.3（左）	69.2		78.5	80.0

表９　身長（cm）の比較（女性）

	N	M
宝島大池Ｃ（中世）	1	154.5
宝島大池Ｂ（縄文）	1	144.0
面縄貝塚（縄文）	1	145.2
宇宿貝塚（弥生）	1	144.8
広田（弥生～古墳）	10	142.8
宇宿東（中世）	1	149.5
津雲（縄文）	16	147.7
吉胡（縄文）	18	147.3
北部九州（弥生）	52	151.2
山口（弥生）	35	151.4
西北九州（弥生）	8	147.9

＊ピアソン式により右大腿骨最大長から算出
（宝島Ｃ人骨は左大腿骨最大長から算出）

表 10　体肢骨長径比および周径比の比較（女性：左）

	橈骨最大長：上腕骨最大長	脛骨最大長：大腿骨最大長	上腕骨最小周：大腿骨中央周	腓骨中央周：脛骨中央周
宝島大池 C（中世）	75.7（右）	–	68.8	51.3（右）
宝島大池 B（縄文）	81.9	(80.4)	74.4	54.3
面縄貝塚（縄文）	77.6	83.2	73.6	-
宇宿貝塚（弥生）	77.6	83.2	73.6	-
広田（弥生～古墳）	83.8	84.6	77.8	54.0
宇宿東（中世）	73.1	80.8	70.5	62.2
津雲（縄文）	82.4	83.4	74.7	61.5
吉胡（縄文）	80.2	82.5	74.7	62.3
北部九州（弥生）	78.2	81.3	70.4	54.6
山口（弥生）	77.6	82.2	71.7	56.5
大友（弥生）	79.4	84.5	75.0	52.9
吉母浜（中世）	77.1	83.2	71.2	55.4
西南日本（中世）	74.5	80.4	75.0	52.9

表 11　大池 C 遺跡 1 号壮年女性人骨からのペンローズ形態距離

	ペンローズ形態距離
大池 B 遺跡（縄文）	5.104
面縄貝塚（縄文）	3.735
宇宿貝塚（弥生）	2.907
広田（弥生～古墳）	5.263
津雲・吉胡（縄文）	3.621
北部九州・山口（弥生）	1.297
宇宿貝塚東地区 2 号人骨（中世）	1.120
中筋川トゥール墓跡人骨（徳之島近世人骨）	2.402

4　成果と課題

（1）大池 B 遺跡石棺墓の年代と系譜

石棺墓の年代　宝島大池B遺跡の石棺墓の年代を発掘調査した時もその後も貝塚時代後期と考え，石棺墓の系譜を九州・本州西端の弥生時代前・中期の山口県土井ヶ浜遺跡などの箱式石棺の墓制が琉球列島まで南下してきたものと考えていた［宝島大池遺跡発掘調査班 1995：280-281］。これは，貝塚後期時代とされる沖縄県読谷村木綿原遺跡などの箱式石棺墓と類似していることなどを根拠にしていた。

しかし，近年，大池 B 遺跡人骨の AMS-^{14}C 年代測定をおこない 3,165 ± 2314C BP の値を得て，暦年較正をおこなったところ，1,280-1,195 cal BC（1 σ），1,370-1,125 cal BC（2 σ）という結果になった。この値は，貝塚時代前期末（前 4 世紀後半～前 5 世紀）の年代であり，縄文時代後期末ないし晩期末を示している［木下ほか 2020］。すなわち，北部九州の弥生時代早･前期までくだらない。

石棺墓・人骨に伴出した遺物はオオツタノハ製の貝輪だけであり，遺物から年代を示すことはで

きないので，^{14}C 年代測定の結果を尊重するほかない。大池 B 遺跡の発掘から 30 年近く経ち，石棺墓の系譜について，根本的に考え直す必要が生じたのである。

石棺墓の系譜　大池遺跡の石棺墓の①構造，②被葬者の特徴をまとめたのちに，その後，南西諸島と西日本における代表的な石棺墓と比較してその系譜について考察する。

【大池 B 遺跡の石棺墓の特徴】

①構造

1. 形態：長方形の箱式石棺。
2. 小口石・側石：ビーチロックを用いており，小口石は 1 枚の立石，側石は立石数枚からなる。
3. 蓋石：蓋石は側石にかからずに，埋土の上に載せている。
4. 底石：全面におおむね 2 列に敷く。底石は扁平で凹凸が少ない。
5. 特殊構造：立石により頭部をコの字形に囲む。
6. 周辺施設：石棺の周囲にビーチロックを配す。目印状の半球形の石がある。

②被葬者

7. 遺体数：1 体単独葬。
8. 葬法：単純葬。
9. 埋葬姿勢：仰臥伸展葬。
10. 年齢・性別：熟年・女性
11. 副葬品・装身具：左前腕に貝輪 3 個着装。

【トマチン遺跡の石棺墓の特徴】

大池 B 遺跡の箱式石棺墓（図 16-1）は，宝島に近い徳之島のトマチン遺跡例［新里編 2013］ときわめてよく似ている（図 16-2）。

トマチン遺跡は鹿児島県徳之島の伊仙町に所在する。2004 ～ 2009 年に発掘調査がなされ，石棺墓 2 基と土坑墓 1 基が検出され，石棺墓 1（SK2）が調査・報告された。出土した土器は喜念 I 式（縄文時代晩期初頭），宇宿上層式（縄文時代晩期前半），仲原式（縄文時代晩期後半～弥生時代前期併行），浜屋原式類似土器（弥生時代中期併行）であり，墓域に対応するのは仲原式土器とされ，突帯文のついた仲原式土器が石棺墓 1 の小口付近からまとまって出土し，供献土器の可能性が指摘されている［新里編 2013：98］。以下，石棺墓 1 の特徴をまとめた。

①構造

1. 形態：長方形の積石石棺。
2. 小口石・側石：石灰岩質の石やビーチロックを用いており，小口は 1 枚の立石 2 段と平石 4 段，側石は楕円立石を含む平石数段平積み。
3. 蓋石：なし。石棺墓 2 には一部に大型の平石が認められる。
4. 底石：全面に平坦な石灰岩類を敷く。中段埋葬は 1 ～ 2 列，上段埋葬は 2 ～ 3 列。
5. 特殊構造：埋葬が下段，中段，上段の 3 段に重なる。
6. 周辺施設：墓域全体に配石が密になされる。

②被葬者

7. 遺体数：上段 4 体，中段 1 体，下段 1 体。

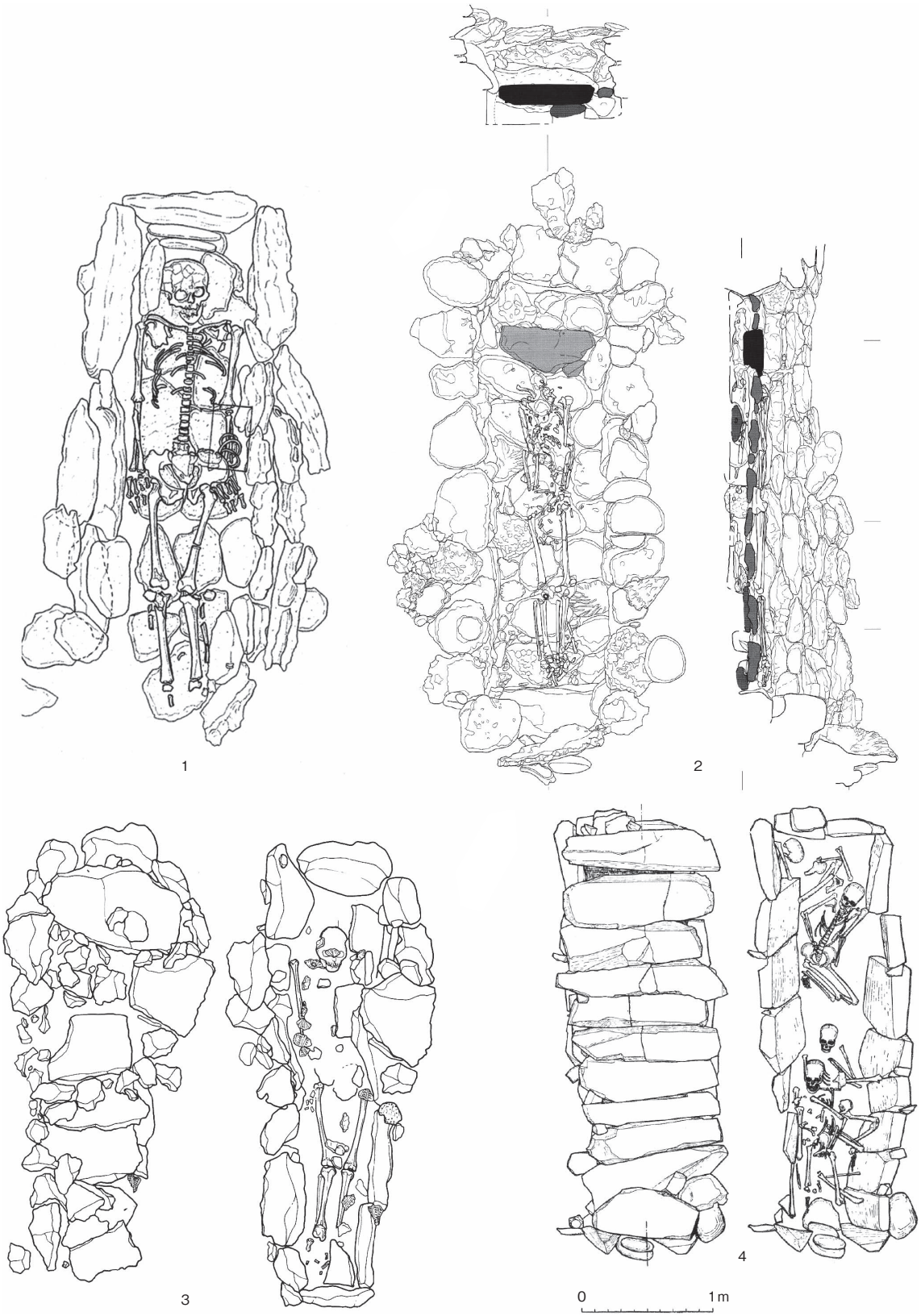


図 16　各地の箱式石棺墓

1　大池 B 遺跡 1 号石棺墓，2　鹿児島県トマチン遺跡石棺墓 1，
3　沖縄県木綿原遺跡第 5 号箱式石棺墓，4　山口県土井ヶ浜遺跡第 5 号石棺墓

8. 葬法：上・中段は単純葬と中段に下段遺骨のうちの頭蓋骨を再葬，下段は単純葬・再葬・追葬。
9. 埋葬姿勢：上段3体および中段と下段の1体は仰臥伸展葬。
10. 年齢・性別：上段1号＝熟年男性2，上段2号＝壮年女性1，上段3号＝壮年男性1，中段4号＝壮年男性，下段5号＝不明成人？
11. 副葬品・装身具：貝輪・貝小玉など。

【木綿原遺跡の石棺墓の特徴】

私たちが当初大池B遺跡箱式石棺墓のルーツだと考えた，木綿原遺跡と土井ヶ浜遺跡の事例に目を通しておく。

木綿原遺跡は沖縄県読谷村の海岸砂丘に所在する，貝塚時代後期の埋葬遺跡である。

1977年に発掘調査がおこなわれ，7基の箱式石棺墓と12体の埋葬人骨が検出された［当真・上原編1978］。石棺墓は大小の違いや重複などで構造が一律ではなく不鮮明であったりするが，比較的整った残りのよい第1・4・5号箱式石棺墓（図16-3）で代表させて特徴を整理する。

①構造

1. 形態：長方形の箱式石棺
2. 小口石・側石：ビーチロックを用いており，小口石は1枚の立石，側石は立石数枚からなる。石は扁平なものを意識して用いた例もあるが，概して厚ぼったい。
3. 蓋石：第5号は数枚の扁平な蓋石をもつ。側石に架橋される明瞭な蓋石。
4. 底石：なし。
5. 特殊構造：なし。
6. 周辺施設：なし。

②被葬者

7. 遺体数：第1号は4体，第2号は2体，第3・4・5・7号は1体。
8. 葬法：単純葬を原則とするが，第1号は上・中・下層から人骨が出土した再葬か。
9. 埋葬姿勢：仰臥伸展葬を原則とする。
10. 年齢･性別：小児1体，若年1体，成人女性2体，壮年男性2体，成人男性2体，熟年男性1体，成人1体。
11. 副葬品・装身具：貝輪・貝小玉など。シャコガイを頭部や足元に置く。

【土井ヶ浜遺跡の石棺墓の特徴】

土井ヶ浜遺跡からは，1953～57年の発掘調査で200体余りの弥生時代の人骨が出土したが［金関ほか1961］，その後の事例を加えると300体をこえる。時期は弥生時代前期後半から中期前半であり，前期の例が多い。1950年代の調査では箱式石棺墓が5基検出された（図16-4）。

① 構造

1. 形態：長方形の箱式石棺。
2. 小口石・側石：いずれも扁平な切石を用いており，小口石は立石2枚ないし立石1枚で，側石は数枚の立石からなる。
3. 蓋石：側石にかかる長さの平石で，完全に蓋の状態をなす。
4. 底石：なし。

5. 特殊構造：なし。
6. 周辺施設：なし。
② 被葬者
7. 遺体数：5体1基，2体2基，1体2基。
8. 葬法：単純葬。
9. 埋葬体位：屈肢葬。
10. 年齢・性別：5体合葬はすべて老年を中心とする壮年以上の男性，2体合葬は老年の男女1例と熟年男性と幼児1例，単葬2例は熟年女性である。
11. 副葬品：なし。

以上，南西諸島を中心とした四つの遺跡の石棺墓を紹介してきた。これらの石棺墓はいずれも扁平な石を選んでつくった箱式石棺の型式であり，すべて側石に複数の石を用いているのは共通しているが，南西諸島の例は小口石が1枚であることを原則にしているのに対して土井ヶ浜遺跡では大型の石棺墓に2枚の例が認められる。大池B遺跡を含めて立石状態での構築だが，トマチン遺跡の例だけは平積みにされているのが特異である。蓋石が明確な石棺は土井ヶ浜遺跡であり，それ以外は側石にかからず棺内の埋土の上に置いた状態である。それはビーチロックという石の性質からくるものであろう。

大池B遺跡が底石をもつのは，トマチン遺跡1号石棺墓と共通する大きな特徴である。それも凹凸の少ない扁平な石灰岩質の石をおおむね2列に丁寧に敷き詰めているのは，この二者の間に系譜上の深い関係があることを推測させる。いずれも腕を体側につけるなどまっすぐな姿勢の仰臥伸展葬を基本とするのは木綿原遺跡とも共通した埋葬体位であり，土井ヶ浜遺跡と異なる南西諸島の特徴とみてよい。

以上のように，大池B遺跡の箱式石棺墓は，土井ヶ浜遺跡例よりも南西諸島の事例との共通点が多く認められ，とくにトマチン遺跡1号石棺と共通した底石は九州本島・本州に見ない大きな特徴である。しかし，南西諸島におけるそのような共通性と同時に，トマチン遺跡1号石棺墓の再葬のための3段にわたる複層構造や石の積み方，あるいはびっしりと石を敷き詰めた外表施設の存在などに個性も指摘することができる。

トマチン遺跡の人骨の炭素14年代の暦年較正年代は，2,700 cal BPから2,400 cal BPの間に分布しているが，海洋リザーバー効果の影響を50%加味したばあいの較正年代は2,400 cal BPから2,000 cal BPになるという［米田ほか2013：172］。すなわち，貝塚時代後期前半，北部九州の弥生時代前期末ないし中期前半までくだり，大池B遺跡よりもおそらく500年以上，あるいは1,000年近く新しいことになる。

琉球列島の墓制をまとめた新里貴之は，石囲い墓から石棺墓への移行を貝塚時代前期後半の室川式（新）と仲原式の境に求め，その終末を貝塚時代後期の初めと考えている。すなわち，石棺墓の出現を九州本土でいうと，縄文晩期のうちで，その終末を弥生中期初め頃においている［新里2013：212］。この説にしたがうと，大池B遺跡の石棺墓は最初期の石棺墓の位置を得ることになる。

その一方，琉球列島の石棺墓の起源は，沖縄県伊是名村の具志川島遺跡群岩立遺跡（貝塚時代前

半期）のような，石灰岩の崖下につくった崖葬墓の配石に起源があるのではないかと木下尚子から教示された。同遺跡の１号人骨は，伸展葬（改葬）人骨で，奥側は石灰岩の壁，手前にだけ石灰岩の板石を配列して，一見，高さの低い石棺墓に見える［中山編 2012］。人骨の炭素 14 年代の暦年較正年代は 2190-1960calBC（前 22- 前 20 世紀）である［木下ほか 2020］。すなわち，九州本島の縄文時代後期前葉と併行する。岩立遺跡例は，「石囲い墓から石棺墓」への移行を想定する新里説とも整合的である。

大池Ｂ遺跡とトマチン遺跡の石棺墓との共通性とそれぞれの年代を認めると，大池Ｂ石棺墓に示される墓制は，その後，貝塚時代後期前半まで長期間にわたって継続するほど定着していた特徴的なものであった。

（設楽・春成）

（2）抜歯の問題

大池Ｂ人骨の形質は，琉球列島先史時代人と共通するものであった。そして，上顎左側切歯，左犬歯，下顎左中切歯は，抜歯の可能性を認めた。

琉球列島では，先史時代から近世にいたるまで抜歯の風習が確実に存在する［春成 2011：326-329］。琉球列島の抜歯例は，貝塚時代前期後半（縄文時代後期併行）の沖縄島（仲宗根，クマヤー洞穴 9 ／数百，安座間原第一 4 ／ 49），奄美大島（下山田Ⅱ 1 ／ 1），種子島（長崎鼻 1 ／ 1），貝塚時代後期（弥生時代併行）の沖縄島（木綿原 4 ／ 12，大当原貝塚 3 ／ 10，大原貝塚 1 ／，古座間味貝塚 3 ／ 7），久米島（具志川グスク 4 ／），徳之島（喜念 2 ／，西ミヤド）から出土した人骨をあげることができる（数値の左は抜歯人骨例数，右は出土人骨総数を示す）。抜歯の対象は，下顎の中切歯・側切歯で，多くは 1,2 本，最多 4 本を抜いている。しかし，その頻度は高くないので，成年式や婚姻儀礼と関連づけて説明することはできない。

抜歯風習がさかんであった中国先史時代では，山東省の北辛文化（7,000 年前）に現れたあと，山東省・江蘇省の大汶口文化（6,000 年前）で盛行する。それは，ほとんどすべての成人男女が対象になっており，例外なく上顎の左右側切歯を抜く型式である。しかし，大汶口文化の末期になると，抜歯の頻度が低くなる一方，これまでの型式と取って代わるように，上下の中切歯を抜く型式が現れる。龍山文化（4,500-4,000 年前）の山東省三里河遺跡，馬家浜文化（6,000-5,000 年前）の江蘇省于敦遺跡，大汶口文化後期？（4,500 年前）の安徽省富庄遺跡，河宕文化（4,000 年前）の広東省河宕遺跡が，この型式の抜歯人骨を出土した代表的な遺跡である。この時期に中国では抜歯の目的が転換したことを予想させるが，抜歯の理由については私見が提出されているだけである［春成 2011］。

中国南部から太平洋諸島に哀悼傷身の習俗として哀悼抜歯が分布している。文献記録にでてくるのは，中国では四川省で明代の 16 世紀，ハワイでは 18 世紀からであるから，先史時代までさかのぼるものではない。中国の少数民族例は，抜いた歯がよくわからないけれども，年代が新しい。ハワイで抜去する歯は，上下の中切歯・側切歯であって，上顎の抜歯の頻度が高く．その年代がひじょうに新しいので，琉球列島の先史時代例とは直接的な関連はない。

大池Ｂ遺跡の人骨の上顎左側切歯・犬歯と下顎左中切歯の欠落と歯槽の閉鎖は，事故による偶然とみなすよりも，琉球列島に頻度は低いけれども分布している風習的な抜歯の１例とみてよいだ

ろう。しかし，抜歯の機会，理由など，文字記録がのこっていない風習の実態や目的を明らかにするのはきわめて困難なことである。

琉球列島の南端に隣接する台湾では，先史時代から20世紀前半にいたるまで抜歯の風習が盛行した。台東市卑南遺跡（卑南文化，4,500～2,600年前）では多数の石棺墓から抜歯人骨が多数見出された［連1987］。それは上顎の左右側切歯と犬歯を抜く型式であって，頻度も高いので，成年式と関連づけて説明しておかしくない状況である。台湾で最初に抜歯人骨の報告があった恒春鎮墾丁寮遺跡（牛稠子文化，4,000年前）のばあいも，同様である［春成2002：14］。その一方，上下の中・側切歯を抜去する風習は，中国先史時代からアジアの各地，シベリア，アラスカまで広がっている。それらと分布を同じくして，髪を切り，耳を削ぎ，顔を傷つけるなど傷面・流血により死者哀悼の意を表す習俗が紀元前後以降の文献に記録されている。日本本土では徳島県内谷石棺墓，奈良県於（うえの）古墳，大阪府花草山23号墳において，抜去した歯を被葬者に副えていた古墳時代，4－6世紀の例がある［春成2007：327-328］。抜歯も傷身の一つであり，ハワイでは抜歯と身体を刀で傷つけることはセットで存在する。状況証拠しか挙げることができないけれども，大池B遺跡の女性の前歯の欠失を，琉球列島の他の例も合わせ，死者哀悼のための抜歯と推定しておく。

（春成）

（3）墓地の問題

私たちの調査では，大池B遺跡からは箱式石棺墓1基を認めただけで，集団墓地を形成していた状況は確認できなかった。しかし，この砂丘に植生がなかったころには，石棺や人骨がいくつも露出していたという。箱式石棺墓付近の現在の微地形は，石棺墓付近の標高が14.0mでその周囲よりも50cmほど高い。石棺墓を構築した頃の標高は15mくらいで，その後の浸食作用により，現在のような凹凸のある砂丘上面になったと推定するならば，大池B遺跡も本来は砂丘上に形成された集団墓地であった可能性がつよくなる。

そして，私たちが発掘した1号石棺墓は，そのうちの1基であったと考えるのが妥当ということになろう。

この墓をのこした生活遺跡は，砂丘にいれたトレンチ調査ではその痕跡を何も見つけだすことができなかった。年代測定の結果を尊重すると，大池B遺跡のほぼ西方450mの海岸段丘上に立地する浜坂貝塚［三友・河口1962］の存在が注目される。同遺跡は，縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡であるから，大池B遺跡と年代的に重なり合う。しかし，二つの遺跡は，かなり離れている。大池B遺跡は浜坂貝塚の人たちの墓地であるとすれば，なぜ浜坂貝塚にもっと近い場所に，墓地をつくらなかったのであろうか。山口県下関市土井ヶ浜遺跡は，本州西端にあり，弥生前－中期と，地域も年代も異なるが，墓地は海岸砂丘上，集落は現在想定されているのは周辺の丘陵の上または裾であって，3ヶ所前後の複数の集落が一つの墓地を営んでいる。墓地と集落との距離は，もっとも近い集落で350m，もっとも遠い集落は2.4km離れている［春成2017：83-86］。墓地の位置をどこに定めるかは，集落形成の歴史，生者と死者との距離，死生観の問題にまで踏み込んで総合的に考察すべき課題であろう。

（春成）

（4）被葬者の問題

大池B遺跡の熟年女性の被葬者は，オオツタノハ製の貝輪3個を腕に着けて石棺墓に丁重に埋葬されていた。彼女は先史時代の宝島で，ごく普通の人であったのか，それとも特別な人であったのか，それは今回のただ1基の発掘例だけで論じることはできない。彼女の前歯の欠失を死者哀悼のための抜歯と推定した。18・19世紀のハワイでは，王や貴族が亡くなったときに，親族が抜歯したので，抜歯していたのは，身分の高い人たちで，女性よりも男性が多かった［島・鈴木1968，石川1985：358，春成2011：329-333］。では，宝島の彼女は，誰が亡くなったときに抜歯したのであろうか。彼女は頭部の2ヶ所に礫石のような鈍器による打撲痕をのこしていた。何が原因で，誰からひどい攻撃をうけたのか，彼女の社会的位置ともかかわる大きな問題である。

大池C遺跡 1号壮年女性人骨は，脳頭蓋が前後に長く，高・狭顔でと突顎が強く，高身長など，琉球列島や日本本土の中世人骨と共通する特徴を多くもつ。縄文人骨である大池B遺跡 1号人骨の特徴とは異なる。頭蓋計測値9項目から求めたペンローズ形態距離からも，大池C遺跡1号人骨は，奄美大島の宇宿貝塚東地区2号人骨（中世）に最も近い。宝島大池C遺跡の壮年女性の再葬人骨は，形質学的調査によって，大池B遺跡の貝塚時代前期末の琉球列島北部・中部圏の先史時代人とは明らかに異なる特徴を示している一方，奄美大島の宇宿貝塚出土の中世人骨との類似性から中世と推定した。年代測定の計画があるので，いずれその可否が明らかになるであろうが，宝島という一つの小島で年代をまったく異にする人骨のデータが得られたことになる。

本人骨については，頭蓋骨を縫合線などに即して二つにはずしてその中に上顎骨と下顎骨をいずれも二つに割って納めている。また，長骨も二つ以上に割ってそのほかの骨を取り囲むように配置しているが，接合の結果同一の個体を離して配置していることがわかった。胸椎が解剖学的位置を保っていたこととあわせてみれば意図的な再葬であることは明らかであり，この人骨の発見者はある程度露出させてはいるがあまり動かすことなく埋め戻したと考えられる。発掘調査時に甲元眞之が中世から近世にかけて奄美・沖縄でおこなわれた洗骨改葬の風習は疫病などによる死者を忌んでおこなわれる場合のあったことを示唆されたが，上述の骨の取り扱いはそうしたよみがえりを恐れるような意識をうかがわせると同時に，近親者の死を悼み一箇所に再埋葬した措置をも推測させる。

二次にわたる大池遺跡の発掘調査とその後の研究により，大池B遺跡では宝島の貝塚時代前期末における墓制の一端を明らかにすることができた。そして，大池C遺跡では中世と推定される再葬人骨を発掘した。時期を異にする2体の人骨の形質を調査・比較した結果，貝塚時代前期人骨と中世人骨との間には連続性が認められなかった。以上のように，先史時代から現代にいたるまで吐噶喇列島に住んだ人々の歴史を解明していくうえでの基礎的な資料を加えて，これからの研究に供することができるようになったことは，調査担当者としてまことに喜ばしく思うしだいである。

（春成・設楽・竹中）

引用文献

石川栄吉 1985「人の死をどのように悼むかーポリネシアの哀悼傷身について」（石川栄吉・岩田慶治・佐々木高明編）『生と死の人類学』343-368頁，講談社。

神澤秀明・角田恒雄・安達　登・篠田謙一 2020「鹿児島県宝島大池B遺跡出土貝塚前期人骨のDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集，257-263頁。

木下尚子・坂本　稔・瀧上　舞 2020「鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨等の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集，231-241頁。

新里貴之編 2013『徳之島トマチン遺跡の研究』トマチン遺跡第1～5次発掘調査・南西諸島葬墓制研究，総287頁，鹿児島大学。

新里貴之 2013「南西諸島の先史時代葬墓制の展開と石棺墓導入の背景」（新里貴之編）『徳之島トマチン遺跡の研究』トマチン遺跡第1～5次発掘調査・南西諸島葬墓制研究，205-224頁，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター。

新里貴之 2015「南西諸島における貝塚時代前期末の墓制」『季刊考古学』第130号，49-51頁，雄山閣。

宝島大池遺跡発掘調査班 1995「吐噶喇列島宝島大池遺跡―特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究」1993年度発掘調査概報―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集，261-282頁。

宝島大池遺跡発掘調査班 1997「吐噶喇列島宝島大池遺跡―特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究」1994年度第2次発掘調査概報―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集，219-251頁。

竹中正巳・峰　和治・設楽博己・春成秀爾 2020「鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨の形質人類学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集，243-256頁。

当真嗣一・上原　静編 1978『木綿原―沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書―』読谷村文化財調査報告書第5集，沖縄県読谷村教育委員会・読谷村律歴史民俗資料館。

中山　晋編 2012『具志川島遺跡群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書，第64集。

馬場悠男 1991「人体計測法―II 人骨計測法」『人類学講座』別巻1，157-358頁，雄山閣。

春成秀爾 2007「弥生・古墳時代の抜歯」『儀礼と習俗の考古学』301-335頁，塙書房。

春成秀爾 2011「哀悼抜歯」『祭りと呪術の考古学』301-359頁，塙書房。（初出は2000『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集）

春成秀爾 2017「在来人と外来人の軋轢」『季刊考古学』第138号，83-87頁。

三友国五郎・河口貞徳 1962「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要』社会科学篇，第11号。

米田 穣・松崎浩之・小林紘一・伊藤　茂・廣田正史 2013「トマチン遺跡出土人骨の同位体分析と放射性炭素年代測定」（新里貴之編）『徳之島トマチン遺跡の研究』トマチン遺跡第1～5次発掘調査・南西諸島葬墓制研究，169-173頁，鹿児島大学。

連 照美 1987「台湾史前時代抜歯習俗之研究」『文史哲学報』第35期，227-254頁，国立台湾大学文学院。

渡辺一夫編 1994『宝島大池遺跡』熊本大学文学部考古学研究室研究報告，第1集，総64頁，熊本大学文学部考古学研究室。

Constandse-Westermann T.S. 1972 *Coefficients of biological distance*. Anthropological Publications, Oosterhout, the Netherlands.

Martin R. and Knussmann R. 1988 *Anthropologie*. Band I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

Yamaguchi B. 1973 Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bulletin of the National Science Museum*, Tokyo, 16(1) : 161-171.

春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
設楽博己（東京大学大学院人文社会系研究科）
竹中正巳（鹿児島女子短期大学生活科学科）

（2020年4月9日受付，2020年10月16日審査終了）

図版１　宝島大池Ｂ遺跡石棺墓調査風景

1　石棺墓の露出状況，遠方は女神山

2　胸部と腹部，右鎖骨上にビーチロックをのせて埋葬

3　ビーチロックを置いた上半身

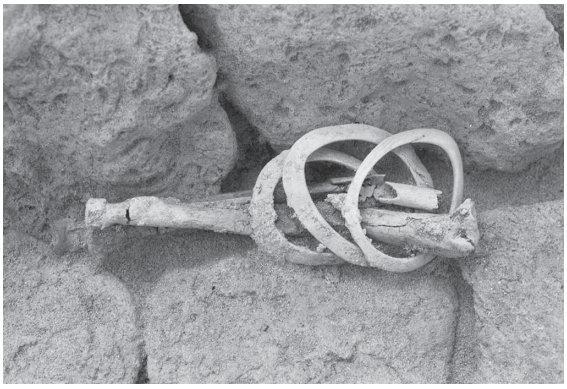
4　人骨取り上げ後の床面の石敷

図版２　宝島大池Ｂ遺跡石棺墓

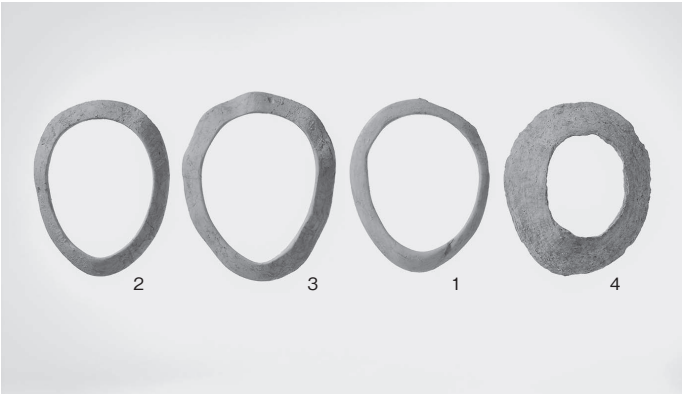
1　遺体の上のビーチロックを取り除いた状態

2　ビーチロックでコ字形に囲んだ頭部

図版３　宝島大池Ｂ遺跡人骨出土状況



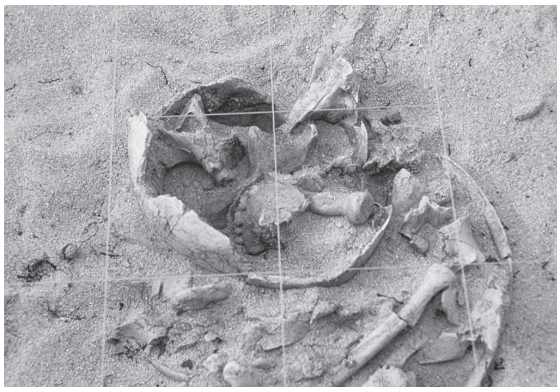
図版４　宝島大池Ｂ遺跡出土人骨の左前腕に装着した貝輪出土状況



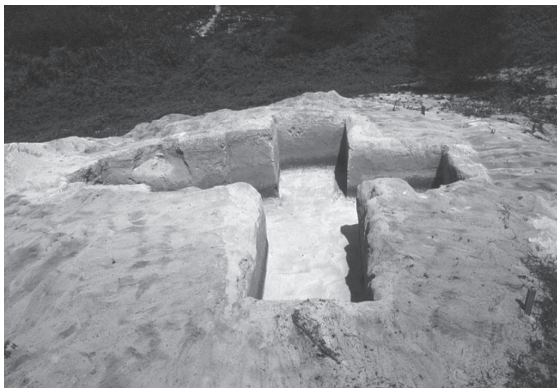
図版５　宝島大池Ｂ遺跡出土貝輪とオオベッコウカサ

1　1号人骨発掘状況

2　1号人骨検出状況



3　1号人骨の頭蓋骨の中に上顎骨などを納めている。



4　第1・2トレンチ

図版6　宝島大池C遺跡発掘状況

図版７　宝島大池Ｂ遺跡石棺墓１号人骨出土状況

図版８　宝島大池Ｃ遺跡出土１号人骨